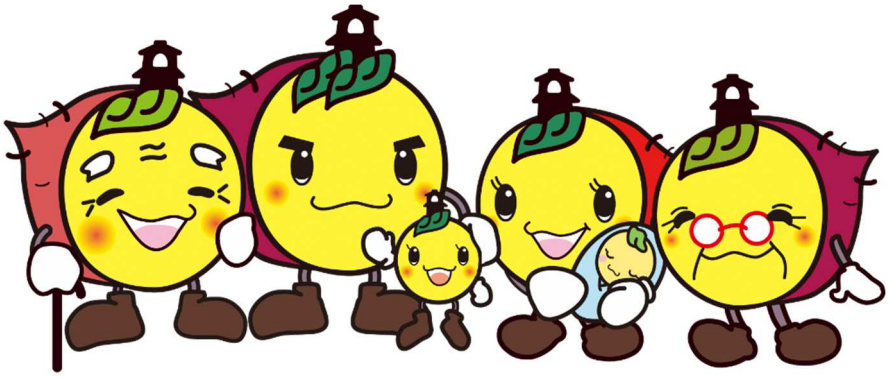
川越市障害者福祉に関するアンケート調査

報　告　書

《概要版》



川越市マスコットキャラクター

ときも

令和２年３月

川　越　市

１．調査目的

川越市障害者支援計画の見直しを行い、次期計画を策定するにあたり、市民アンケート調査を行い、その分析データを活用することにより、障害者の生活上の課題・住民ニーズを明らかにするものです。

２．調査対象

調査名称	対象者
１．身体障害者調査	身体障害者手帳所持者から 1,536 人を無作為抽出
２．知的障害者調査	療育手帳所持者から 545 人を無作為抽出
３．精神障害者調査	精神障害者保健福祉手帳所持者から 562 人を無作為抽出
４．難病患者調査	難病患者見舞金受給者から 407 人を無作為抽出
５．施設入所者調査	施設入所者全員 136 人
６．特別支援学校高等部 3 年生調査	特別支援学校高等部 3 年生全員 53 人
７．グループホーム入居者調査	グループホーム入居者全員 85 人
８．高次脳機能障害者調査	精神障害者保健福祉手帳所持者から該当者 21 人を抽出
９．発達障害者調査	精神障害者保健福祉手帳所持者から該当者 166 人を抽出

３．調査時期

令和元年　9 月～10 月

４．調査方法

郵送配布・郵送回収（施設、学校、グループホームは直接回収含む）

５．回収状況

調査区分	対象者数	回収数	回収率	有効回収数※	有効回収率
１．身体障害者調査	1,536	796	51.8%	790	51.4%
２．知的障害者調査	545	242	44.4%	239	43.9%
３．精神障害者調査	562	236	42.0%	236	42.0%
４．難病患者調査	407	183	45.0%	182	44.7%
５．施設入所者調査	136	126	92.6%	122	89.7%
６．特別支援学校高等部 3 年生調査	53	29	54.7%	25	47.2%
７．グループホーム入居者調査	85	84	98.8%	84	98.8%
８．高次脳機能障害者調査	21	7	33.3%	7	33.3%
９．発達障害者調査	166	67	40.4%	67	40.4%
合計	3,511	1,770	50.4%	1,752	49.9%

※有効回収数とは、回収された調査票のうち、ひとつでも回答のあった調査票の数をいう。

６．調査項目

A.　基本的な属性
B.　障害の状況
C.　介助・援助の状況
D.　健康状態や医療
E.　外出や余暇の過ごし方
F.　幼稚園・保育園・学校
G.　雇用・就労
H.　将来の希望
I.　相談・情報入手
J.　福祉サービス
K.　災害対策
L.　差別・疎外感
M.　成年後見制度
N.　施設入所の状況
O.　学校卒業後
P.　行政への要望等

７．この報告書における調査結果の見方

○ この《概要版》は、報告書の中から前回平成 28 年度の調査（H29 年 3 月）と比較が可能な設問や本調査において新たに設けた設問を中心に掲載している。

○ 調査結果の数値は、回答率（%）で表示している。回答率（%）の母数は、その質問項目に該当する回答者の総数で、その数は n= で示している。

○ 回答率（%）については、小数点第 2 位を四捨五入し、小数点第 1 位までを表示している。このため、その合計数値は必ずしも 100%とはならない場合がある。

○ 回答には、単一回答（○は 1 つ）と複数回答の 2 種類があり、複数回答の場合、その回答率（%）の合計は 100%を超える場合がある。

○ 図表の問のタイトル及び、回答の選択肢は、簡略化して表現している場合があるほか、100%帯グラフについては、原則として 5%未満の数値については割愛している。正式な問の項目及び値は、調査票を参照願いたい。

まとめと考察

1．障害の状況（介助・援助の状況含む）

【まとめ】

《現在の生活で困っていることや悩んでいること》

〇現在の生活で困っていることが「特にない」との回答は、身体障害者と知的障害者で 3 割を超えて最も多くなっています。

〇外出時の困難さに関する回答である「外出がしにくい」が全ての種別で上位を占めており、また、「公共の乗り物の利用が難しい」についても、身体障害者と知的障害者で 2 位、難病患者で 4 位となっています。

〇知的障害者と発達障害者は「周りの人の理解が少ない」が 1 位、精神障害者と難病患者は、「生活費が足りない」、「医療費が多くかかる」など経済的な項目が多くなっています。

《介助・援助を受けている相手》

〇「介助・援助を受けていない」が最も多いのは、身体障害者、精神障害者、難病患者で、特に難病患者は 5 割を超えています。また、身体障害者と難病患者では「配偶者」から介助・援助を受けている割合が 2 割を超えて 2 位となっています。

〇比較的若い世代が多い知的障害者、特別支援学校高等部 3 年生、発達障害者では「親」が 1 位となっていますが、40 代から 60 代までの回答者が 64.8%を占めている精神障害者でも「親」は 3 割を超えて 2 位となっており、介助をしている高齢の親の存在がうかがえます。

《介助・援助を受けている場面》

〇「どのようなときに介助・援助を受けているか」との設問に対して、「外出をするとき」、「通院をするとき」、「簡単な買い物をするとき」など、移動を伴う場面についての回答が、全ての障害の種別で多くなっています。
また、知的障害者、精神障害者、高次脳機能障害者、発達障害者では、「お金の管理をするとき」も上位の回答となっています。

【考察／検討課題】

■現在の生活で困っていることや悩んでいることについて、外出時の困難を抱え、移動を伴う場面に介助・援助を受けていると回答した方が全ての障害の種別で多くなっていることから、外出しやすい環境整備が望まれます。

■障害の特性及び障害のある人について、周囲の理解を深めていくための周知啓発が必要です。

■特に精神障害者において、介助をしている高齢の親の存在がうかがえ、親亡き後の支援が望まれます。

2．健康状態や医療

【まとめ】

《健康管理や医療について困ったり不便に思うこと》

○身体障害者と知的障害者及びグループホーム入居者では、「特にない」が 5 割前後に達し、他の種別よりも多くなっています。

○「特にない」を除くと、「専門的な治療を行っている医療機関が身近にない」が全ての種別で、回答の 1 位又は 2 位にあげられています。また、精神障害者、難病患者、発達障害者では「医療費の負担が大きい」が 2 割を超え、他の種別よりも多くなっています。特に発達障害者は 29.9%で、前回平成 28 年度調査での 12.2%から 2 倍以上となっています。

《医療的ケア》

○「受けていない」、「無回答」を合わせた割合は全ての障害種別で 80%台半ば以上となっていますが、身体障害者手帳に記載されている障害別や手帳の等級別に細かくみると、「音声・言語・そしゃく機能障害」、「肢体不自由（脳原性）」の身体障害者では 70%台に低下し、医療的ケアを受けている割合が高くなっています。

○医療的ケアの実施者は、身体障害者、知的障害者、難病患者では「家族」が 1 位となっていることから、家族の負担が大きいものと推察されます。

【考察／検討課題】

■専門的な治療が可能な医療機関や、健康に関する問い合わせ窓口などの情報提供が求められます。

■障害のある人に対する医療行為を行う家族の負担軽減を検討することが望まれます。

3．外出や余暇の過ごし方

【まとめ】

《外出の際に困っていること》

○「道路や建物・駅に段差が多い」「歩道が整備されていない」、「障害者用トイレが少ない」、「障害者用の駐車スペースが少ない」などのハード面の問題と、「周囲の視線が気になる」、「困ったときに周囲の人の手助けや理解を得られない」などソフト面の問題とに大別すると、身体障害者と難病患者は前者への回答が多く、知的障害者、精神障害者、発達障害者は後者の回答が多くなっています。

また、現在の生活で困っていることとして「生活費が足りない」、「医療費が多くかかる」などの回答が多かった精神障害者と難病患者は、ここでも「外出するとお金がかかる」を上位にあげています。

○障害者用のトイレや駐車スペースについては、障害のない人が使用していることにより障害のある人が必要な時に利用できないといった意見が見られます。

《普段の生活の中でほしいと思う活動》

○全ての種別で「旅行に出かける」が 1 位又は 2 位を占めているほか、「友人・知人と会って交流を深める」、「スポーツをする」、「地域の行事や活動に参加する」など、人との交流を伴ったり、目的としたりする活動への回答が多くなっています。

また、知的障害者、精神障害者、難病患者、発達障害者では「教養・資格取得に関する学習をする」も多く、特に発達障害者では 4 割を超えています。

《生涯学習活動や余暇活動をするために必要な条件》

〇発達障害者を除く全ての種別で、希望する活動を行うための条件の 1 位と 2 位を「活動する場所が近くにあること」、「費用を心配しなくてよいこと」の 2 つが占めています。発達障害者でも「費用を心配しなくてよいこと」が 1 位、「活動する場所が近くにあること」が 3 位であり、手軽に参加できる活動への要望は非常に強いといえます。
特に精神障害者の「費用を心配しなくてよいこと」は 6 割近くに達し、経済面での負担軽減に関する要望が他の種別よりも強いといえます。また、身体障害者、精神障害者、難病患者では、共通して 4 位に「一緒に行く仲間がいること」があげられており、人のつながりを重視していることが読み取れます。

【考察／検討課題】

■道路、建物、駅、歩道などハード面のバリアフリー化については、整備等に合わせて着実に推進していくことが求められます。

■「周囲の視線が気になる」、「困ったときに周囲の人の手助けや理解を得られない」などソフト面の課題も挙げられており、様々な心身の特性や考え方をもつ人々が、相互に理解を深めようとコミュニケーションを取り、支え合う「心のバリアフリー」の普及啓発が望まれます。

■一方で、あらかじめ、障害の有無、年齢、性別、出身の国や地域等にかかわらず多様な人々が利用しやすいよう、都市や生活環境を計画するユニバーサルデザインの考え方についても、普及啓発を図っていくことが求められます。

■障害者用のトイレや駐車スペースを、障害のある人が必要な時に利用できるよう、周知啓発を図っていく必要があります。

■教養や資格取得の学習機会を求めている人のための環境整備や、費用面などに配慮した手軽に参加できる活動の情報提供などが望まれます。

4．幼稚園・保育園・学校

【まとめ】

《学校で勉強する場合に希望する学習形態》

〇幼稚園や保育園、学校などに通っている人が、学校で勉強する場合に希望する学習形態について、「障害のある仲間のクラスで勉強しながら、障害のない仲間とも勉強したい」が 5 割を超え最も多いのは知的障害者、「障害のあるなしにかかわらず、一緒のクラスで勉強したい」が 6 割前後と最も多いのが難病患者と発達障害者、学習形態の希望が分散しているのが身体障害者と精神障害者で、障害の種別により明確な特徴が表れています。

《学校教育修了後の希望》

〇幼稚園や保育園、学校などに通っている人の、学校教育修了後の希望については、全体として「就労したい」との回答は 3 割から 6 割台で多くなっていますが、精神障害者と難病患者ではそれ以上に、更に上の学校に進学したいとの希望が強くなっています。

〇知的障害者では「職業訓練校に通いたい」との回答も 3 割を超えて多く、就労に向けた希望が多くなっています。

【考察／検討課題】

■学習形態において、障害のある人と障害のない人が同じ教室で学習できる環境など、希望する学習形態で学ぶことができる環境づくりが望まれます。

■学校教育修了後に希望する進路へ進めるよう、環境の整備や企業、学校や周囲の理解とサポートが求められます。

5．雇用・就労

【まとめ】

《就労状況・就労意向》

〇収入を伴う仕事をしている人のうち、「会社員・公務員・団体職員」など正社員の割合が多いのは身体障害者と難病患者で、それぞれ 40.9%、39.7%となっています。

〇前回平成 28 年度調査結果と比較すると、「会社員・公務員・団体職員」の割合は、身体障害者、知的障害者、精神障害者で多くなっており、正社員化の進展がうかがえます。

《１年間の収入の額》

〇全ての種別で「年収 100 万円未満」が最も多くなっていますが、特に知的障害者、精神障害者、発達障害者でその割合は 4 割から 5 割近くとなっており、経済的に厳しい状況に置かれていることがうかがえます。
また、難病患者も「年収 100 万円未満」との回答は 3 割を超えていますが、年収が 200 万円以上の回答の合計も 32.3%と他の種別と違いがみられています。

《生活を支える収入》

〇全ての種別で「年金」や「障害年金」が 1 位又は 2 位を（身体障害者では 1 位と 2 位を）占めています。難病患者は正社員の割合が 4 割と多く、年収でも他の種別よりも高い割合が多いことから、年金の占める割合は他の種別よりも少なく、4 割を下回っています。

【考察／検討課題】

■働くことが難しい障害のある人に、今後の生活などの相談窓口の整備が求められます。

■障害のある人にとって働きやすい環境整備がされるよう、企業等の理解・サポートが求められます。

6．将来の希望

【まとめ】

《将来の生活に不安なこと》

〇全ての種別で「病気になること」、「家族がいなくなること」が 3 位以内の上位を占め、知的障害者を除くと、「更に障害が重くなること」も多くなっています。

〇知的障害者、精神障害者、発達障害者では「家族がいなくなること」の回答が 7 割を超えており、親亡き後への不安が特に高いといえます。

【考察／検討課題】

■将来、障害のある人の家族がいなくなり、本人ひとりになった場合の生活など、親亡き後を受け止める体制の整備が求められます。

7．相談・情報入手

【まとめ】

《相談状況・相談意向》

○悩みや困ったことなどの相談先としては、全ての種別で「家族等の同居人」が 6 割から 7 割台で最も多くなっています。2 位以下では「病院・医師・看護師等」、「友人・知人・近所の人」などの回答が多いですが、知的障害者では「施設や作業所の職員」が 2 位で、日常生活の過ごし方が反映された結果となっています。

○「相談したいが、できない」は発達障害者以外では 10%未満ですが、発達障害者は 13.4%とやや多くなっています。

《相談したいができない理由》

○身体障害者では「相談することにためらいがある」（42.4%）が最も多いですが、2 位である「どこ（誰）に相談していいかわからない」（39.4%）は、知的障害者（47.1%）、精神障害者（52.6%）、難病患者（55.6%）で最も多くなっており、相談窓口に関する情報提供が更に必要であることがうかがえます。

また、発達障害者では、「相談しても満足のいく回答がもらえない」と 9 人中 8 人が回答しており、相談対応について、点検・見直しの必要性が示されています。

《情報入手・コミュニケーションで困ること》

○困ることとして共通して上位にあるのは「どこに何を相談したらよいかわからない」ですが、身体障害者でも視覚障害では「案内表示が分かりにくい」、聴覚障害では「難しい言葉や早口で話されるとわかりにくい」が多く、知的障害者、精神障害者、発達障害者では「話をうまく組み立てられない、うまく質問できない」が多いなど様々となっており、障害の種類によりきめ細かな対応が必要であることが示唆されています。

【考察／検討課題】

■相談窓口でどのような相談ができるのか、どこに相談窓口があるのかなどを周知する必要があります。

■総合的な相談窓口の設置、相談者の相談内容や障害の特性に応じて適切な対応ができる相談員などの配置により、相談者に対するきめ細かい対応が必要です。

■障害のある人が、ためらうことなく相談できる体制や窓口に関する積極的な情報提供が求められます。

■サービス内容の紹介や利用手続き、新しい制度の説明などについて、障害のある人の特性に応じた媒体を活用し、情報提供を引き続き充実させていく必要があります。

8．福祉サービス

【まとめ】

《福祉サービスの利用状況と今後の利用意向》

○障害福祉サービスについて、「現在利用している」割合は総じて 10%未満ですが、身体障害者と難病患者の「補装具費の支給」、知的障害者の「計画相談支援」、精神障害者の「自立支援医療（更生・育成・精神通院）」は他と比較して多くなっています。

○「今後利用したい」割合は現在の利用割合よりも全体的に伸びており、10%台から 20%台が中心となっています。中でも「施設入所支援」（知的）、「共同生活援助（グループホーム）」（知的）、「基本相談支援」（知的・精神）は 20 ポイント前後の伸びとなっています。

《福祉サービスに関する情報入手経路》

○福祉サービスに関する情報の入手経路としては、身体障害者（57.2%）、知的障害者（44.8%）、精神障害者（42.4%）、難病患者（63.7%）では、「市・県の広報」が最も多くなっています。また、知的障害者では「家族や知人の話」（37.7%）、精神障害者では「医療機関」（34.7%）も次いで多くなっています。

○発達障害者では、「パソコンやスマートフォン、携帯電話」（43.3%）が最も多く、次いで「市・県の広報」、「医療機関」がいずれも 41.8%となっています。

○高次脳機能障害者では全体の 7 人中、「市・県の広報」、「医療機関」、「障害者の施設や団体等の機関紙やパンフレット」がいずれも 3 人となっています。

《福祉の手続きをすることが難しいと感じる場面》

○難しいと感じる場面については全ての種別で「必要な手続きが多く手間がかかる」が突出して多く、手続きの簡素化を求める強い要望がうかがえます。

《福祉の手続きを行っている方》

○手続きを行っている方は「自分」、「父・母」とに大別され、「自分」は身体障害者、精神障害者、難病患者、「父・母」は知的障害者、特別支援学校高等部 3 年生、高次脳機能障害者、発達障害者で多くなっています。

【考察／検討課題】

■ＩＣＴの活用などにより、福祉サービスの手続きを簡素化することや、情報を利用しやすく、わかりやすいものに整えることが望まれます。

■福祉の手続きが難しいと感じている方へのサポート体制を整えることが求められます。

9．災害対策

【まとめ】

《災害時の避難ができるか》

○障害の種類や等級等まで細かく分けてみると、「1 人でできる」は内部障害（55.3%）、精神障害者 2 級（40.7%）及び 3 級（53.6%）、難病患者（60.4%）、発達障害者（40.3%）などが 4 割を超えて多くなっています。「支援者がいるのでできる」は知的障害者（療育手帳）Ａ（41.8%）、精神障害者 1 級（42.9%）が 4 割を超えています。「できない」は平衡機能障害（54.5%）、知的障害者（療育手帳）Ⓐ（45.9%）が 4 割を超えています。

○災害時の避難についての状況は、障害の種類や等級により異なることを踏まえた対応が求められる結果となっています。

《災害時に必要とする支援》

○災害時にあるとよいと思う支援・援助として、「必要な投薬や治療が受けられる」は、身体障害者、精神障害者、難病患者、高次脳機能障害者、発達障害者でそれぞれ最も多く、精神障害者と難病患者では 6 割、発達障害者では 5 割を超えています。

○「避難所の設備（トイレ等）を充実させる」も全ての種別で上位にあげられています。

○知的障害者では避難所にたどり着く前の段階である「救助や避難時に声かけをしてくれる」、「避難するのを手助けしてくれる」が 1 位、2 位を占めており、他の種別とニーズを異にしています。

【考察／検討課題】

■災害時の避難が困難と思われる方への対応策を検討する必要があります。

■災害時に支援を受けたい方に、避難行動要支援者名簿の登録を促すよう周知が求められます。同時に、支援する側に声かけなどの意識づけが求められます。

■1 人 1 人の障害特性が異なることを踏まえ、災害時の対応を検討する必要があります。

■避難所において、必要な投薬の確保や治療を受けられるなどの環境整備の検討の必要があります。

10. 差別・疎外感

【まとめ】

《差別・疎外感を感じること、その場面》

○障害があることによる差別や疎外感を「たまに感じる」、「いつも感じる」を合わせた『差別を感じる』と回答した人の割合が 5 割を超えているのは、知的障害者、精神障害者、特別支援学校高等部 3 年生、発達障害者であり、前回平成 28 年度調査結果とほぼ同じ値です。

○「ほとんど感じることはない」との回答の割合は、身体障害者では 7.2 ポイント、知的障害者では 1.3 ポイント、精神障害者では 1.7 ポイント、難病患者では 5.0 ポイント、発達障害者では 2.0 ポイントそれぞれ前回調査よりも減少しており、共生社会づくりの観点から懸念される状況にあります。

《障害のある方への配慮として良いと思ったことや配慮があって助かったこと、あると良い合理的配慮》

（自由記述の主な意見から読み取れること）

○声かけされること、また、かけた声に返事が返ってくることは多くの人が望んでいる一方で、時には声をかけないことも配慮となる場合があります。

○バスやタクシーといった公共交通機関の利用などの移動に関する意見が多くみられます。声かけやさりげない配慮等に対する感謝もある一方で、席を譲る、目的地まで付き添う等配慮を求める場面も多くあります。

○障害の程度等は人により違うため、障害や病名で行動を制限するのではなく、個人の特性に合わせて仕事や学業に就くことができるような環境づくりが望まれています。

○ユニバーサルトイレ等を設置するといったハード面の整備だけでなく、利用しやすい工夫をするといった心のバリアフリーの意識が求められています。

【考察／検討課題】

■障害特性及び障害のある人についての理解を深めるため、周知啓発が求められます。

■個人の特性に合わせて仕事や学業に就くことができるような環境づくりが望まれます。

■ハード面のバリアフリーだけではなく、サービス等を利用しやすい工夫、調整をするといった心のバリアフリーの意識が求められます。

11. 成年後見制度

【まとめ】

《成年後見制度の認知度と利用意向》

〇成年後見制度を「利用したことがある（または、現在利用している）」、「知っているが利用したことはない」、「聞いたことはあるが詳しくはわからない」を合わせても回答の割合は 6 割前後にとどまっています。
また、制度の活用について「今は必要ないが、将来必要になったら活用したい」との回答は、最も多い発達障害者が 46.3%で、その他の種別では 2 割から 3 割台、「わからない」が身体障害者、知的障害者、精神障害者、難病患者、発達障害者で 3 割から 4 割近くとなっています。

〇知的障害者、精神障害者、高次脳機能障害者、発達障害者では、特に「お金の管理をするとき」に介助を受けるとの回答が多く、また介助は「親」に頼っている割合が高くなっています。

〇選択肢は各種調査票にて一部異なりますが、平成 28 年度調査と比較すると、高次脳機能障害者を除く全ての種別で「今は必要ないが、将来必要となったら活用したい」の割合は減少しています。しかし、同時に「活用したいとは思わない」も減少しています。この結果は利用意欲が後退したと考えるよりも、今回の調査で新たに「わからない」の選択肢を設けたことの影響と考えることが妥当と思われます。

【考察／検討課題】

■特に「お金の管理」をするときに介助を必要としている割合が多い知的障害者、精神障害者、高次脳機能障害者、発達障害者の種別の人を中心に制度を理解し、利用の促進につながるよう周知する必要があります。

■障害のある人の親亡き後を見据え、成年後見制度の内容を十分理解した上で制度の利用について判断いただくため、本制度についての周知をさらに進めることが求められます。

調査項目

A. 基本的な属性

(1) 回答者の年齢

身体障害者と難病患者は高齢者層が多く、知的障害者と発達障害者は年齢の偏りは少ない

【調査結果から読み取れること】

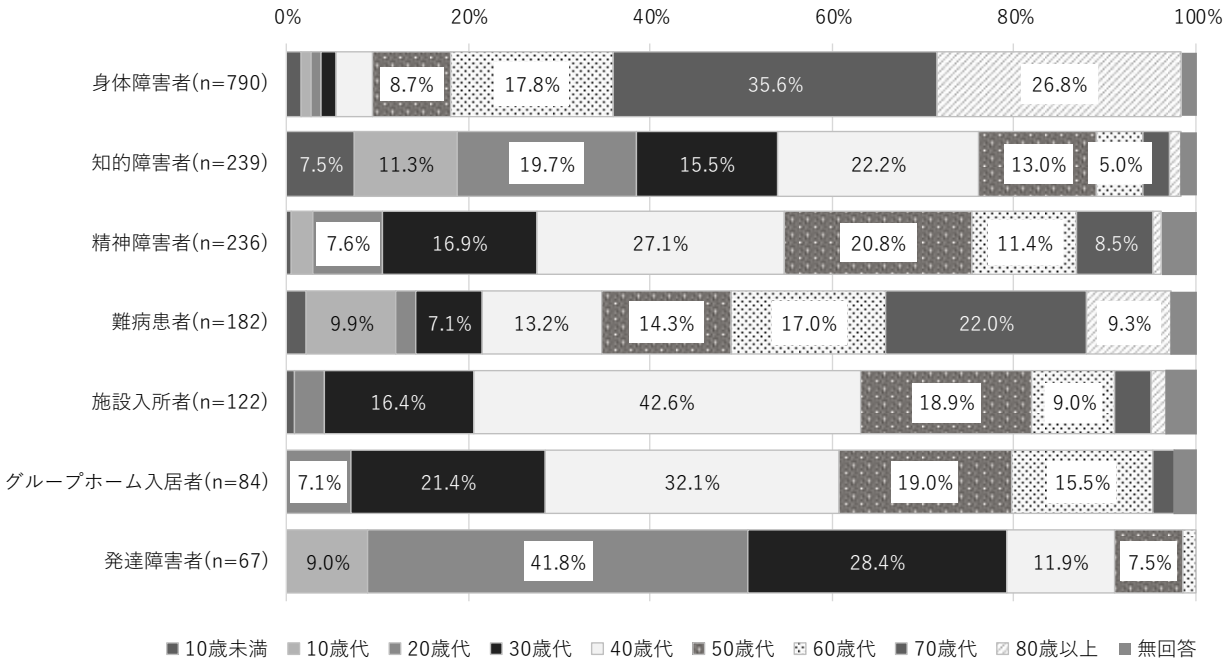
身体障害者と難病患者は高齢者が主体、精神障害者と施設入所者、グループホーム入居者は中年者が主体、知的障害者と発達障害者では年代の偏りは少ないといえる。

前回平成 28 年度調査と比較すると、身体障害者では 70 歳以上が 4.7 ポイント増加、知的障害者では最も多い年代が 30 歳代から 40 歳代に移行、精神障害者では最も多い年代は 40 歳代で変わらないものの、50 歳代は 8.7 ポイント増加するなど、高齢化が進んでいることがうかがえる。一方、難病患者では最も多い年代は 70 歳代で変わらないものの、前回調査では 0.0%の 10 歳未満と 10 歳代が今回合わせて 12.1%を占めるなど、若年層で患者がみられている。

【障害種別ごとの結果】

身体障害者では 70 歳代が最も多く、知的障害者では 40 歳代、精神障害者では 40 歳代、難病患者では 70 歳代、施設入所者では 40 歳代、グループホーム入居者では 40 歳代、発達障害者では 20 歳代が最も多い。また、高次脳機能障害者については、7 名中、30 歳代、40 歳代、50 歳代が各 2 名、70 歳代が 1 名となっている。

図：回答者の年齢（単数回答）



B. 障害の状況

(1) 現在の生活で困っていることや悩んでいること

「特にない」を除くと、「外出がしにくい」が全ての種別で上位
「周りの人の理解が少ない」、「生活費が足りない」、「医療費が多くかかる」などが１位の障害種別も

【障害種別ごとの結果】

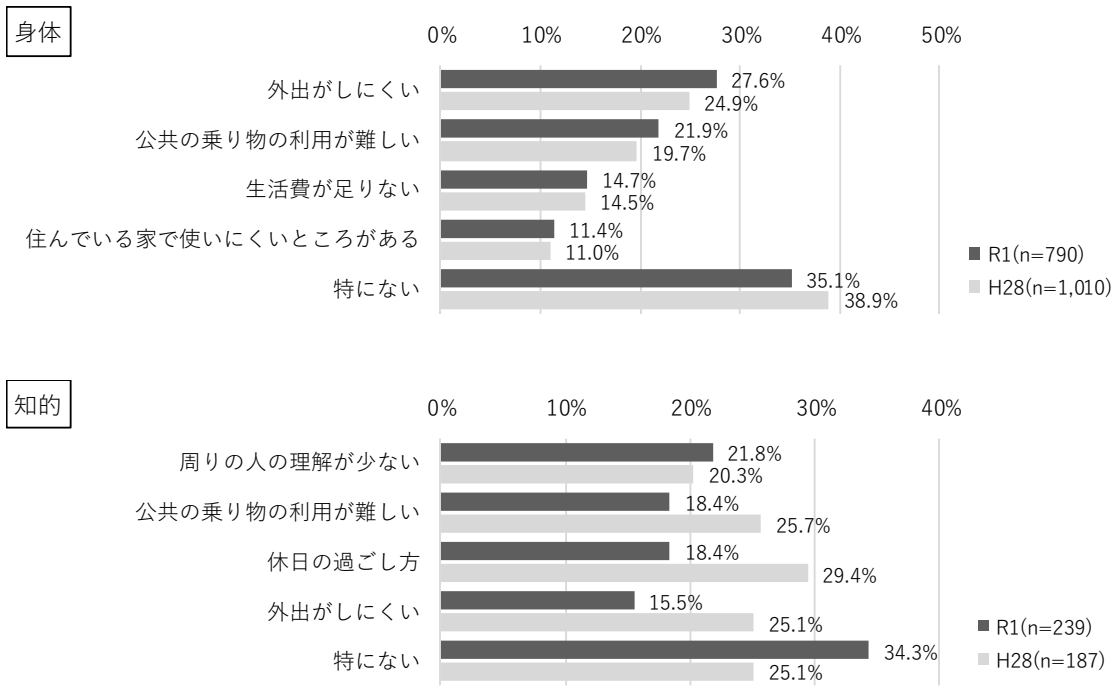
障害別にみると、身体障害者では「特にない」（35.1%）が最も多く、次いで「外出がしにくい」（27.6%）となっている。知的障害者では「特にない」（34.3%）が最も多く、次いで「周りの人の理解が少ない」（21.8%）となっている。「外出がしにくい」（15.5%）は５位。精神障害者では「生活費が足りない」（28.4%）、難病患者では「医療費が多くかかる」（28.6%）が最も多くなっている。

施設入所者では「外出がしにくい」、「特にない」がいずれも 29.5%で最も多く、グループホーム入居者では「外出がしにくい」（35.7%）が最も多い。

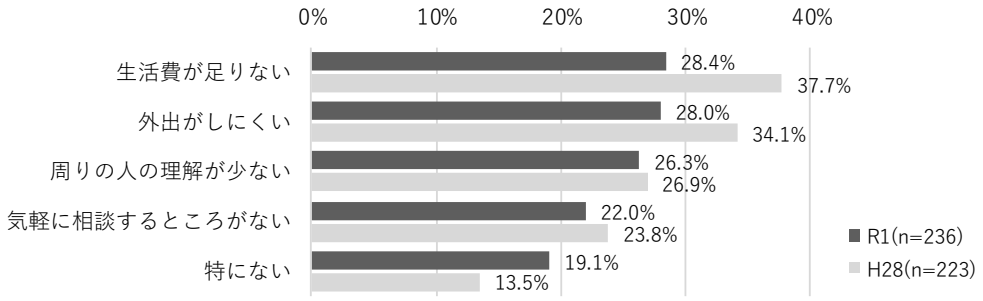
高次脳機能障害者では全体の７人中、「気軽に相談するところがない」（7 人中 4 人）が最も多く、「働く場がない」、「外出がしにくい」、「周りの人の理解が少ない」がそれぞれ２人となっている。

発達障害者では「生活費が足りない」、「周りの人の理解が少ない」がそれぞれ 37.3%で最も多くなっている。

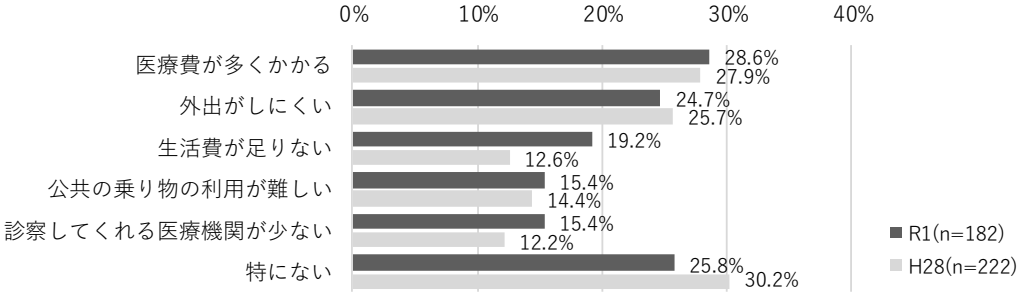
図：現在の生活で困っていることや悩んでいること（複数回答　※割合の多い項目を抜粋）



精神



難病



C. 介助・援助の状況

(1) 介助・援助の状況

「介助・援助は受けていない」と「親」が上位

【障害種別ごとの結果】

身体障害者では「介助・援助は受けていない」(35.1%)、次いで「配偶者」(27.2%) となっている。

知的障害者では「親」(63.6%) が最も多くなっている。

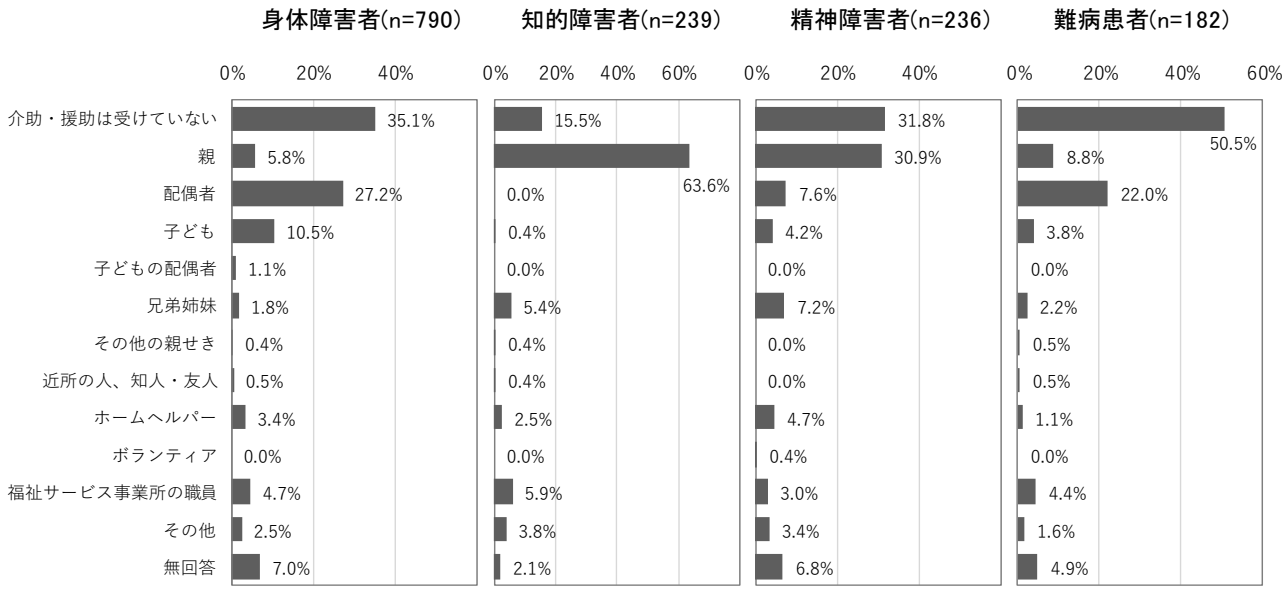
精神障害者では「介助・援助は受けていない」(31.8%) が最も多いが、「親」(30.9%) もほぼ同数となっている。

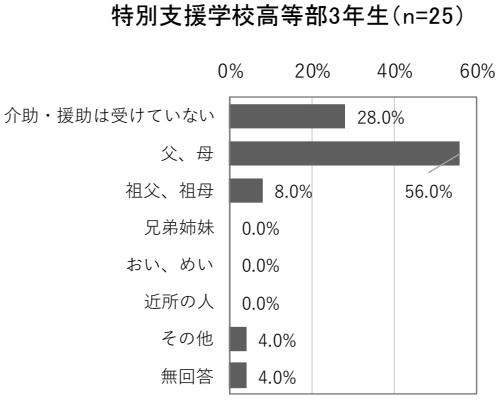
難病患者では「介助・援助は受けていない」(50.5%) が最も多く、次いで「配偶者」(22.0%) も身体障害者と並んで 2 割を超えている。

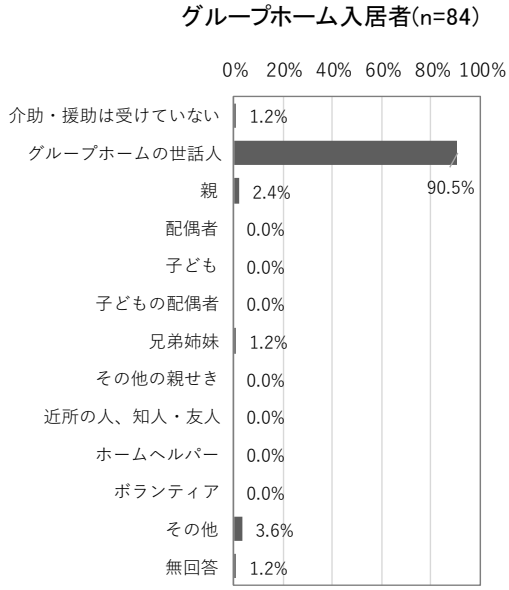
特別支援学校高等部 3 年生では「父・母」(56.0%)、グループホーム入居者では「グループホームの世話人」(90.5%)、高次脳機能障害者では「配偶者」、「ホームヘルパー」がそれぞれ 7 人中 2 人で最も多くなっている。

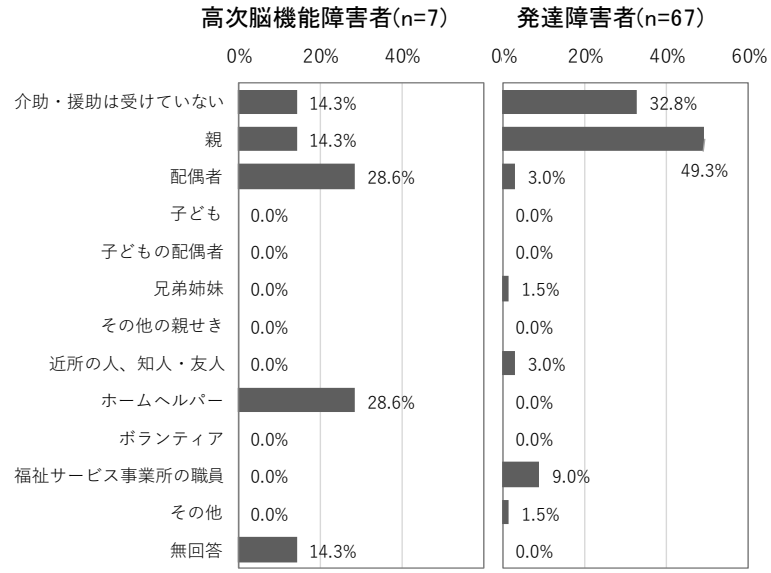
発達障害者では「親」(49.3%) が最も多くなっている。

図：主に介助・援助している人（単数回答）









(2) 実際に介助・援助を受けている場面

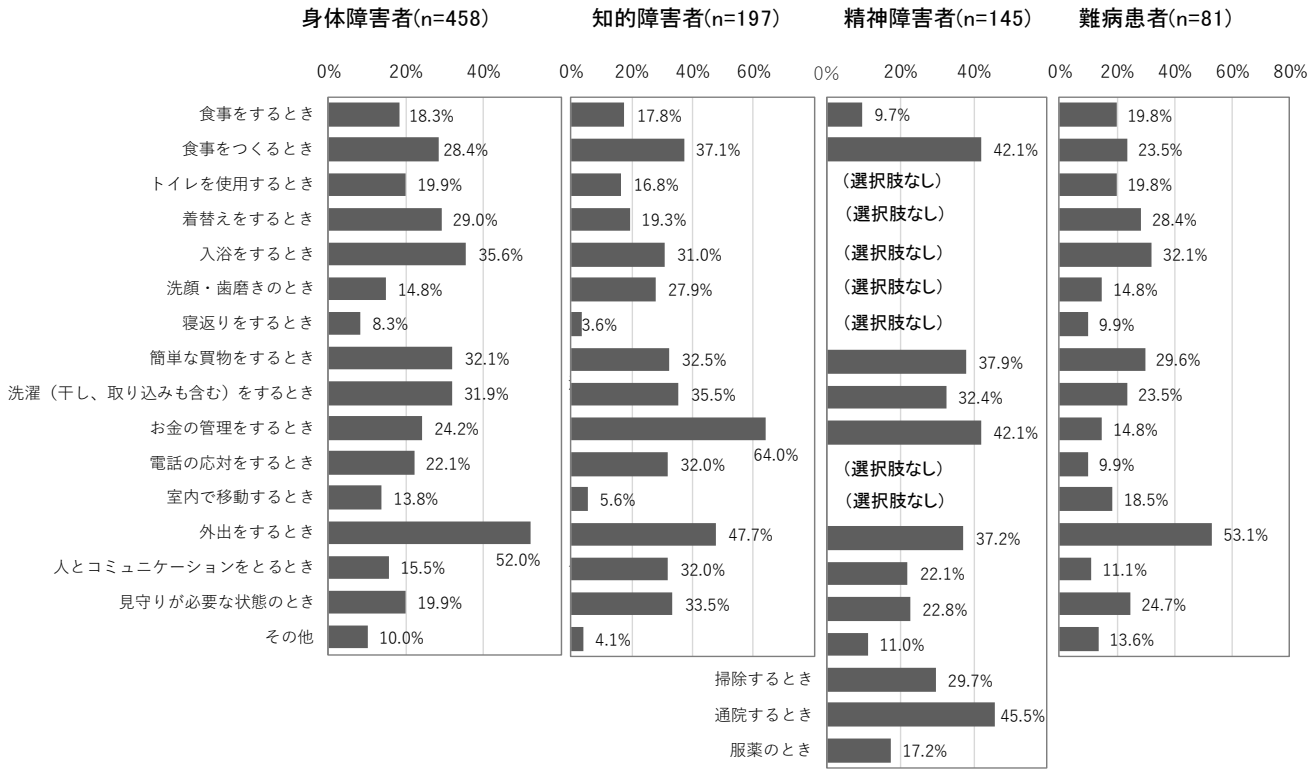
「外出をするとき」、「通院をするとき」、「買い物をするとき」など、外に出かける場面や「お金の管理をするとき」が上位

【障害種別ごとの結果】

障害別にみると、身体障害者では「外出をするとき」(52.0%)、知的障害者では、「お金の管理をするとき」(64.0%)、精神障害者では、「通院するとき」(45.5%)、難病患者では、「外出をするとき」(53.1%) がそれぞれ最も多くなっている。

特別支援学校高等部 3 年生では、「買い物に出かけるとき」(56.0%)、グループホーム入居者では、「家事 (調理、掃除、洗濯)」(78.0%)、高次脳機能障害者では「食事をつくるとき」(7 人中 5 人)、発達障害者では、「通院するとき (66.7%)」がそれぞれ最も多くなっている。

図：実際に介助・援助を受けている場面（複数回答）



D. 健康状態や医療

(1) 健康管理や医療について困ったり不便に思うこと

「特にない」を除くと、「専門的な治療を行っている医療機関が身近にない」が 1 位又は 2 位

「医療費の負担が大きい」が 2 割を超えるのは精神障害者、難病患者、発達障害者

【障害種別ごとの結果】

身体障害者では、「特にない」（48.5%）が最も多く、次いで「専門的な治療を行っている医療機関が身近にない」（12.8%）となっている。

知的障害者では、「特にない」（46.4%）が最も多く、次いで「専門的な治療を行っている医療機関が身近にない」（16.7%）となっている。

精神障害者では、「特にない」（38.6%）が最も多く、次いで「医療費の負担が大きい」（22.9%）、「専門的な治療を行っている医療機関が身近にない」（16.1%）となっている。

難病患者では、「特にない」（38.5%）が最も多く、次いで「医療費の負担が大きい」（24.2%）、「専門的な治療を行っている医療機関が身近にない」（22.5%）となっている。

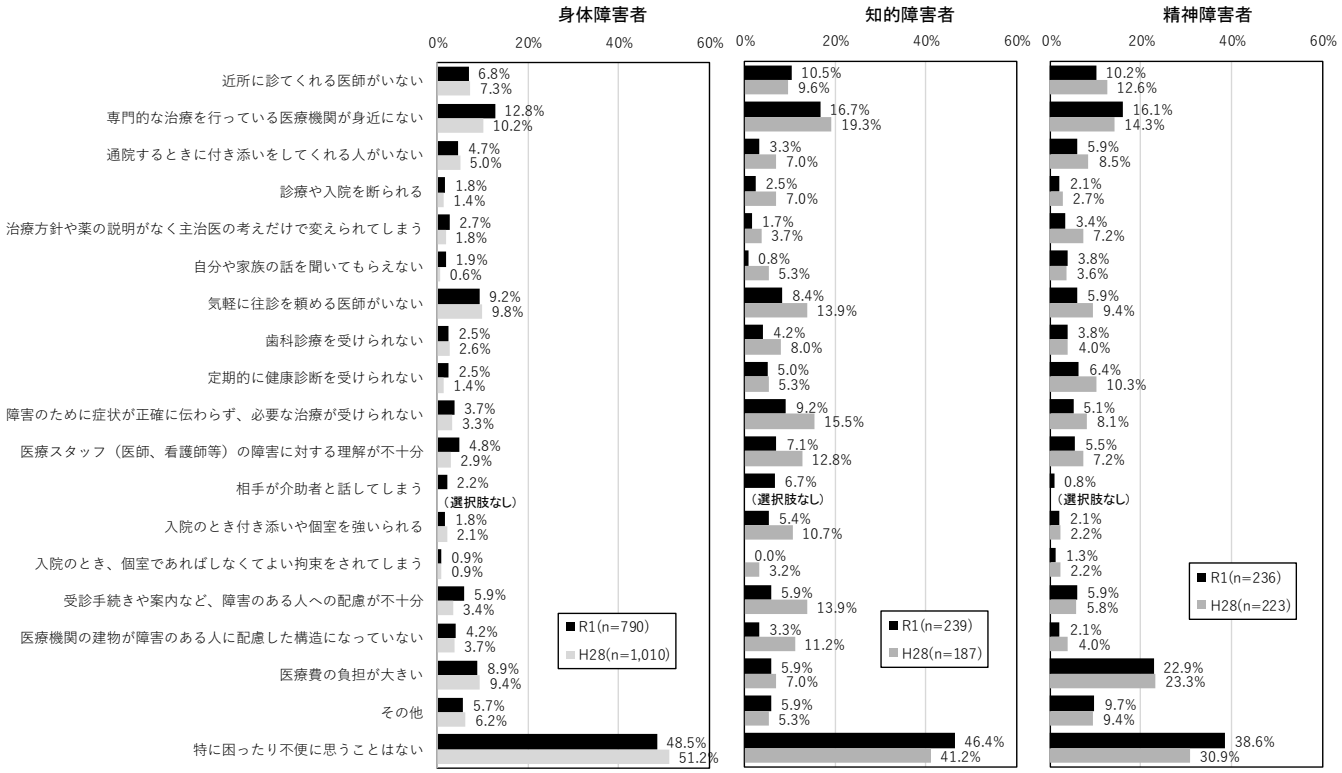
施設入所者では「特にない」（40.2%）が最も多く、次いで「近所に診てくれる医師がいない」、「専門的な治療を行っている医療機関が身近にない」がいずれも 20.5%となっている。

グループホーム入居者では「特にない」（52.4%）が最も多く、次いで「専門的な治療を行っている医療機関が身近にない」が 14.3%となっている。

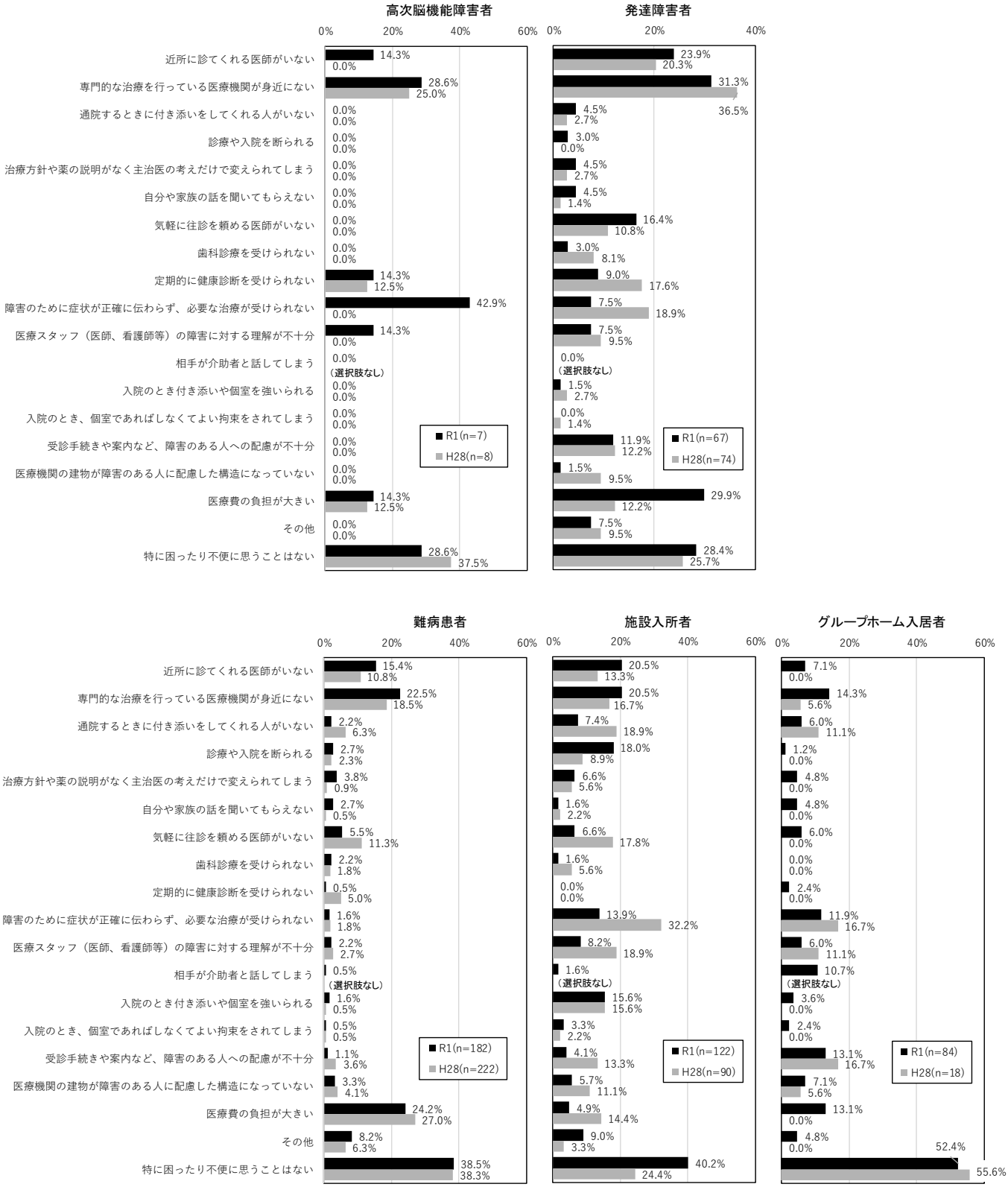
高次脳機能障害者では全体の 7 人中、「障害のために症状が正確に伝わらず、必要な治療が受けられない」が 3 人、「専門的な治療を行っている医療機関が身近にない」、「特にない」がいずれも 2 人となっている。

発達障害者では、「専門的な治療を行っている医療機関が身近にない」（31.3%）が最も多く、次いで「医療費の負担が大きい」（29.9%）、「特にない」（28.4%）となっている。

図：健康管理や医療について、困ったり不便に思うこと（複数回答）



図：健康管理や医療について、困ったり不便に思うこと（複数回答）



(2) 医療的ケアについて

障害の種類や等級別にみると、医療的ケア（※）を受けている割合が 20%を超える場合も

※医療的ケアとは、医師の指導の下に、保護者や看護師が日常的・応急的に行う経管栄養やたんの吸引などの医療行為。

【障害種別ごとの結果】

医療的ケアを「受けていない」が身体障害者で 68.5%、知的障害者で 79.9%、精神障害者で 76.3%、難病患者で 79.1%、グループホーム入居者で 77.4%、高次脳機能障害者で全体の 7 人中 7 人（100%）、発達障害者で 86.6%となっている。

受けている医療的ケアの種類は、身体障害者の平衡機能障害では「経管栄養」（9.1%）、音声・言語・そしゃく機能障害では「気管切開部の衛生管理」（9.1%）、肢体不自由（脳原性）の「経管栄養」（5.7%）、「導尿」（5.7%）、内部障害の「酸素吸入」（8.0%）が多くなっている。

難病患者では「吸引」（4.4%）、「経管栄養」（3.8%）がやや多くなっている。

	受けていない	経管栄養	吸引	ネブライザー	気管切開部の衛生管理	導尿	酸素吸入	人工呼吸器	その他	無回答
身体障害者（n=790）	68.5%	1.9%	1.3%	0.8%	1.3%	3.0%	3.4%	1.0%	5.3%	18.0%
視覚障害（n=58）	81.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.7%	0.0%	**6.9%**	10.3%
聴覚障害（n=79）	78.5%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	1.3%	17.7%
平衡機能障害（n=11）	54.5%	**9.1%**	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	36.4%
音声・言語・そしゃく機能障害（n=22）	45.5%	4.5%	0.0%	0.0%	**9.1%**	4.5%	0.0%	0.0%	4.5%	31.8%
肢体不自由（上下肢）（n=319）	67.7%	3.8%	2.5%	1.6%	2.2%	4.4%	1.9%	2.2%	3.4%	19.7%
肢体不自由（脳原性）（n=35）	68.6%	**5.7%**	2.9%	2.9%	2.9%	**5.7%**	0.0%	0.0%	**14.3%**	8.6%
内部障害（n=262）	64.1%	1.5%	1.1%	0.4%	1.5%	3.4%	**8.0%**	1.5%	**7.6%**	16.0%
知的障害者（n=239）	79.9%	0.8%	0.8%	0.4%	0.0%	0.4%	0.4%	0.0%	3.8%	14.2%
Ⓐ（n=37）	67.6%	2.7%	2.7%	2.7%	0.0%	0.0%	2.7%	0.0%	2.7%	24.3%
A（n=55）	78.2%	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	0.0%	0.0%	**5.5%**	12.7%
B（n=91）	82.4%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.2%	14.3%
C（n=43）	93.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.3%	4.7%
精神障害者（n=236）	76.3%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	11.4%	11.4%
1級（n=14）	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	**28.6%**	21.4%
2級（n=140）	76.4%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	**9.3%**	12.9%
3級（n=69）	84.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	**13.0%**	2.9%
難病患者（n=182）	79.1%	3.8%	4.4%	1.1%	1.1%	0.5%	1.6%	1.6%	**6.0%**	7.7%
発達障害者（n=67）	86.6%	1.5%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.5%	6.0%

※5%をこえるものを太字とした。

医療的ケアの実施者は、身体障害者では「家族」（44 人）、「自分」（43 人）、「看護師」（30 人）、知的障害者では「家族」（9 人）、「看護師」（3 人）、「自分」（2 人）、精神障害者では「自分」（12 人）、「看護師」（10 人）、「家族」（6 人）、難病患者では「家族」（12 人）、「自分」（9 人）、「看護師」（9 人）、発達障害者では「自分」（3 人）、「家族」（2 人）となっている。

E. 外出や余暇の過ごし方

(1) 外出の際に困っていること

共通して多いのは「自動車や自転車が多くて危険を感じる」と「道路や建物・駅の階段や段差」

【障害種別ごとの結果】

身体障害者では、「道路や建物・駅に階段や段差が多い」(29.2%) が最も多く、次いで「特にない」(26.7%)、「歩道が整備されていない」(20.1%) となっている。平成 28 年度調査と比較すると、「特に困っていることはない」が 8.8 ポイント減少している。

知的障害者では、「特にない」(35.1%) が最も多く、次いで「困ったときに周囲の人の手助けや理解を得られない」(16.7%)、「周囲の視線が気になる」、「家族に負担がかかる」がいずれも 15.9% となっている。

精神障害者では、「外出するとお金がかかる」(35.6%) が最も多く、次いで「特にない」(29.7%)、「周囲の視線が気になる」(27.1%) となっている。平成 28 年度調査と比較すると、「周囲の視線が気になる」(平成 28 年度調査では「他人の視線が気になる」) が 8.3 ポイント減少している。

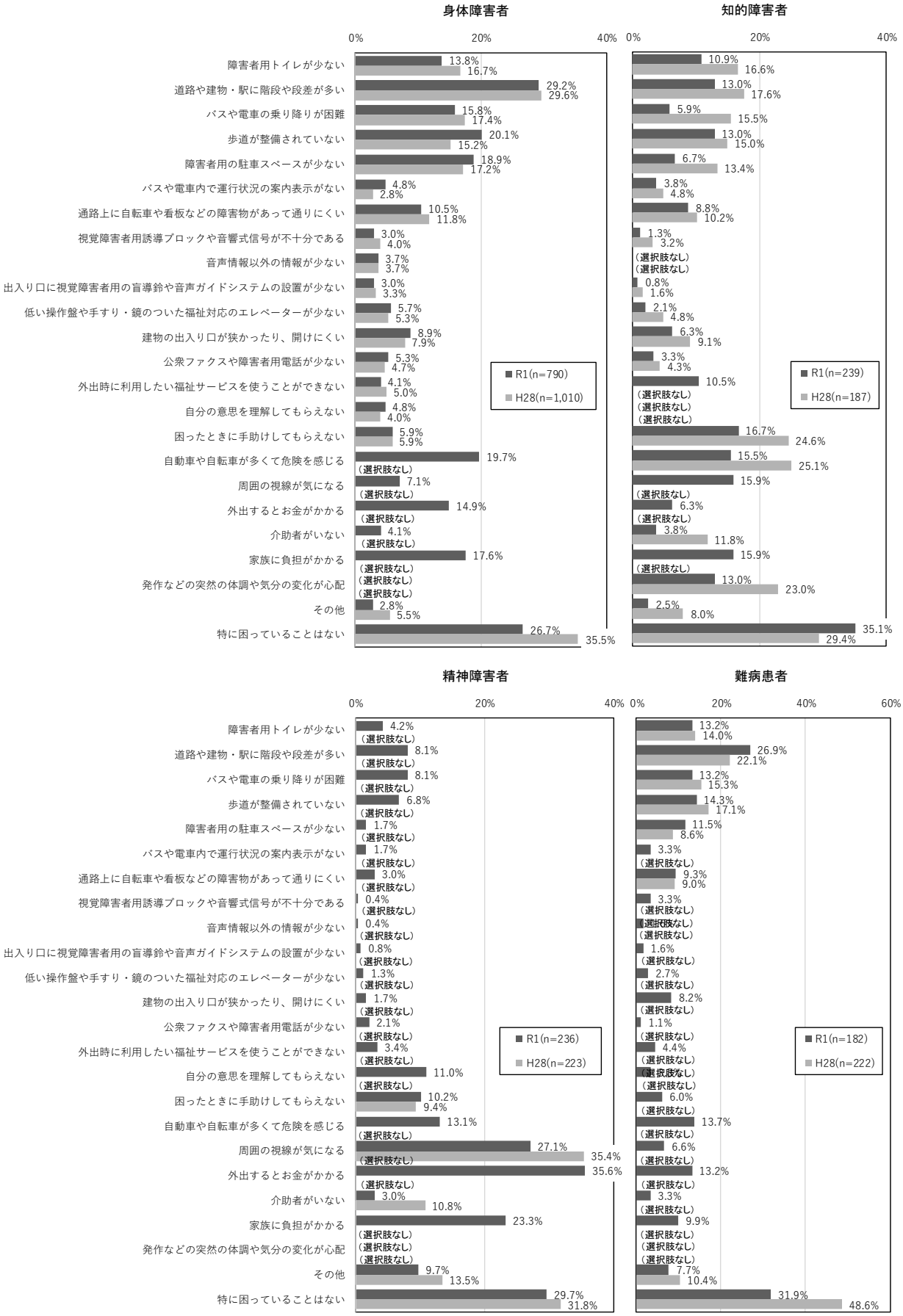
難病患者では、「特にない」(31.9%) が最も多く、次いで「道路や建物・駅に階段や段差が多い」(26.9%)、「歩道が整備されていない」(14.3%) となっている。平成 28 年度調査と比較すると、「特に困っていることはない」が 16.7 ポイント減少している。

施設入所者では、「特にない」(37.7%) が最も多く、次いで「歩道・道路外の段差」(22.1%)、「トイレの利用」(19.1%) となっている。

高次脳機能障害者では、全体の 7 人中、「外出するとお金がかかる」(5 人) が最も多くなっている。

発達障害者では、「外出するとお金がかかる」(38.8%) が最も多く、次いで「周囲の視線が気になる」(35.8%) となっている。平成 28 年度調査と比較すると、「周囲の視線が気になる」(平成 28 年度調査では「他人の視線が気になる」) が 4.7 ポイント減少している。

図：外出の際に困っていること（複数回答）※精神障害者の選択肢「困ったときに手助けしてもらえない」に対応する H28 での選択肢は「必要なときに、まわりの人の手助け・配慮が足りない」となっている。



(2) 普段の生活の中で、機会はないがほしいと思う活動

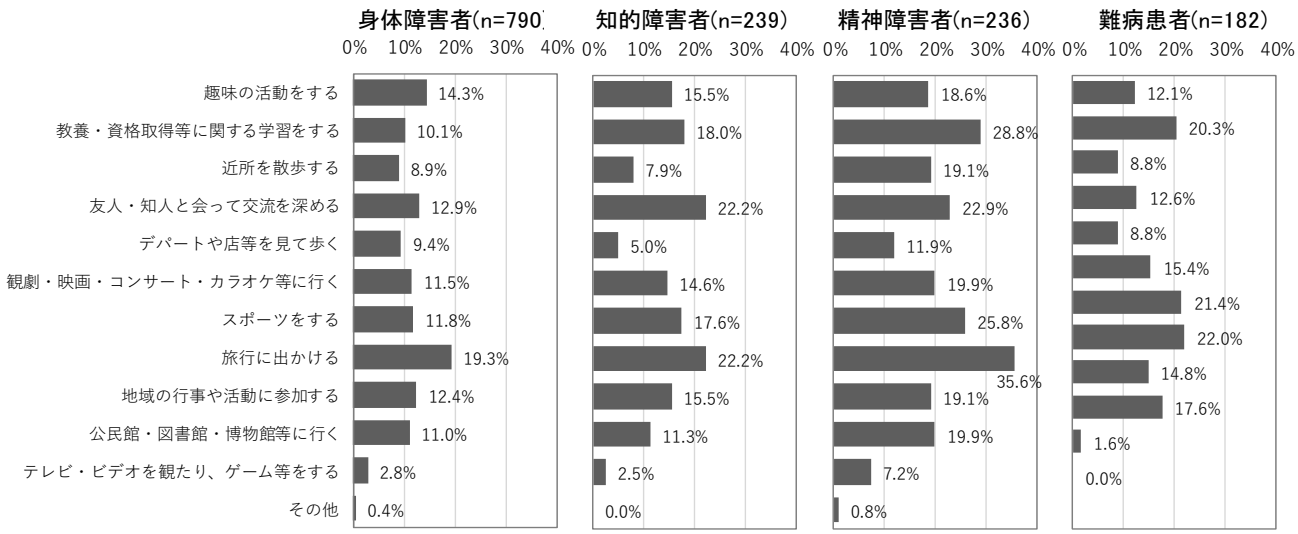
「旅行に出かける」が共通して１位又は２位

【障害種別ごとの結果】

身体障害者では、「旅行に出かける」(19.3%)、知的障害者では、「友人・知人と会って交流を深める」、「旅行に出かける」(いずれも 22.2%)、精神障害者では、「旅行に出かける」(35.6%)、難病患者では、「旅行に出かける」(22.0%) が最も多くなっている。

高次脳機能障害者では、全体の 7 人中、「友人・知人と会って交流を深める」(3 人) が最も多く、発達障害者では、「教養・資格取得に関する学習をする」(44.8%) が最も多くなっている。

図：普段の生活の中で「機会はないがほしいと思う」活動の割合（活動ごとに単数回答）



(3) 生涯学習活動や余暇活動をするために必要な条件

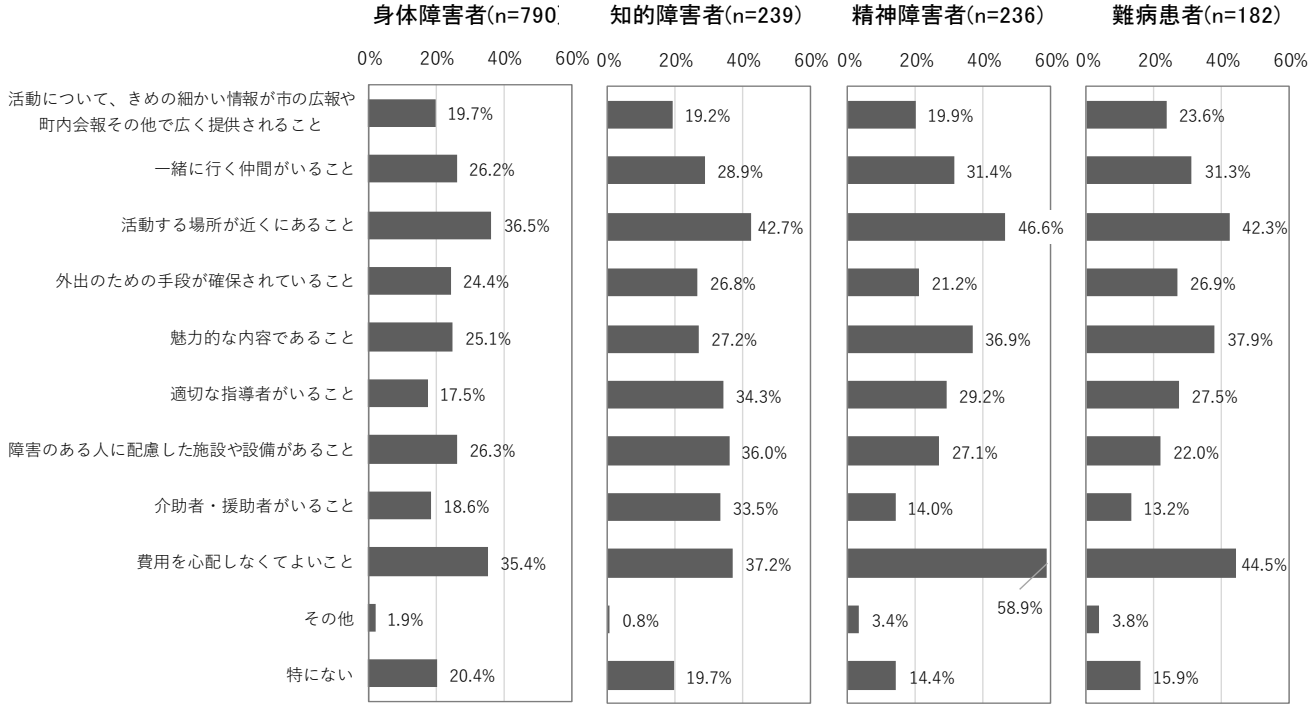
ほぼ全ての種別で「活動する場所が近くにあること」、「費用を心配しなくてよいこと」が１位と２位

【障害種別ごとの結果】

身体障害者、知的障害者では「活動する場所が近くにあること」が最も多く、次いで「費用を心配しなくてよいこと」となっている。精神障害者と難病患者では反対に「費用を心配しなくてよいこと」が最も多く、次いで「活動する場所が近くにあること」となっている。

高次脳機能障害者では、「活動する場所が近くにあること」(7 人中 4 人)、発達障害者では、「費用を心配しなくてよいこと」(64.2%) が最も多くなっている。

図：希望する活動を行うために必要な条件（複数回答）



F.　幼稚園・保育園・学校

(1) 学校で勉強する場合に希望する学習形態

障害種別により学習形態の希望は３通り

【障害種別ごとの結果】

身体障害者では「障害のあるなしにかかわらず、一緒のクラスで勉強したい」（36.8%）が最も多くなっているが、3 位の「同じような障害のある仲間たちのクラスで勉強したい」も 21.1%に上っている。知的障害者では「障害のある仲間のクラスで勉強しながら、障害のない仲間とも勉強したい」（55.3%）、難病患者と発達障害者では「障害のあるなしにかかわらず、一緒のクラスで勉強したい」がそれぞれ 54.2%、66.7%と、圧倒的に多くなっている。精神障害者では「同じような障害のある仲間たちのクラスで勉強したい」、「障害のある仲間のクラスで勉強しながら、障害のない仲間とも勉強したい」がいずれも 33.3%、「障害のあるなしにかかわらず、一緒のクラスで勉強したい」が 16.7%と分散している。

図：学校で勉強する場合に希望する学習形態（単数回答）

	障害のあるなしにかかわらず、一緒のクラスで勉強したい	同じような障害のある仲間たちのクラスで勉強したい	障害のある仲間のクラスで勉強しながら、障害のない仲間とも勉強したい	わからない	その他	無回答
身体障害者(n=19)	36.8%	21.1%	26.3%	5.3%	0.0%	10.5%
知的障害者(n=38)	15.8%	18.4%	55.3%	10.5%	0.0%	0.0%
精神障害者(n=6)	16.7%	33.3%	33.3%	0.0%	16.7%	0.0%
難病患者(n=24)	54.2%	20.8%	4.2%	20.8%	0.0%	0.0%
発達障害者(n=6)	66.7%	0.0%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%

(2) 学校教育修了後の希望

障害の種別により学校教育修了後の希望は様々に分かれる

【障害種別ごとの結果】

身体障害者では「短大・大学・大学院に進学したい」、「就労したい」がいずれも 36.8%と最も多くなっている。知的障害者、発達障害者では「就労したい」との回答がそれぞれ 60.5%、66.7%と最も多くなっている。精神障害者では「短大・大学・大学院に進学したい」、「専門学校・専修学校・高等技術専門学校に進学したい」の回答がいずれも 66.7%と最も多くなっている。

難病患者では「短大・大学・大学院に進学したい」(41.7%)が最も多くなっているが、「就労したい」との回答も 33.3%で続いている。

図：学校教育修了後の希望（複数回答）

	短大・大学・大学院に進学したい	専門学校・専修学校・高等技術専門学校に進学したい	障害者施設に入所したい	就労したい	障害者のための通所サービスを利用したい	職業訓練校に通いたい	家庭内で過ごしたい	その他	わからない	特に考えていない	無回答
身体障害者(n=19)	36.8%	10.5%	5.3%	36.8%	15.8%	0.0%	0.0%	5.3%	15.8%	0.0%	10.5%
知的障害者(n=38)	7.9%	23.7%	13.2%	60.5%	26.3%	31.6%	7.9%	5.3%	10.5%	5.3%	0.0%
精神障害者(n=6)	66.7%	66.7%	0.0%	33.3%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
難病患者(n=24)	41.7%	4.2%	8.3%	33.3%	29.2%	4.2%	0.0%	0.0%	4.2%	4.2%	0.0%
発達障害者(n=6)	16.7%	16.7%	0.0%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

G. 雇用・就労

(1) 就労状況・就労意向

「会社員・公務員・団体職員」など正社員の割合が高いのは、身体障害者と難病患者
全体的に正社員化の進展がみられる

【障害種別ごとの結果】

収入を伴う仕事をしている人の 18～64 歳の割合は、身体障害者 43.2%、知的障害者 35.9%、精神障害者 33.5%、難病患者 54.8%、施設入所者 10.6%、グループホーム入居者 66.2%、高次脳機能障害者 6 人中 4 人、発達障害者 34.9%である。

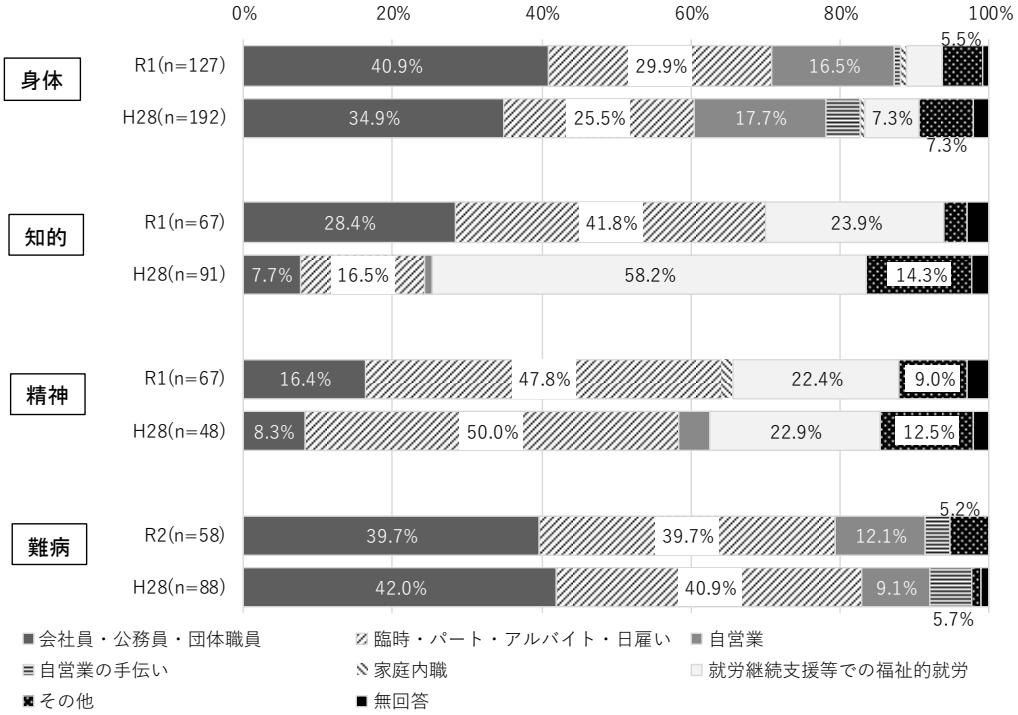
仕事の形態について、身体障害者では「会社員・公務員・団体職員」(40.9%)、知的障害者では「臨時・パート・日雇い」(41.8%)、精神障害者では「臨時・パート・日雇い」(47.8%)、難病患者では「会社員・公務員・団体職員」、「臨時・パート・日雇い」(ともに 39.7%)、施設入所者では「就労継続支援等での福祉的就労」(63.6%)、グループホーム入居者では「就労継続支援等での福祉的就労」(44.0%)、高次脳機能障害者では 5 人中 2 人が「臨時・パート・日雇い」、発達障害者では「臨時・パート・日雇い」(56.5%)がそれぞれ最も多くなっている。

平成 28 年度調査と比較すると、「会社員・公務員・団体職員」の割合が、身体障害者で 6.0 ポイント、知的障害者で 20.7 ポイント、精神障害者で 8.1 ポイント増加している。

また、現在、収入を伴う仕事をしていない人のうち身体障害者では 8.2%、知的障害者では 44.0%、精神障害者では 36.5%、難病患者では 14.2%、高次脳機能障害者では 2 名中 2 名、発達障害者では 46.3%が働きたい（※）と考えている。

※回答者全体から「収入を伴う仕事をしている」、「無回答」を除いた全体に対する、今後、日中を「一般企業で働きたい」または「施設内で就労したり、生産活動をしながら過ごしたい」または「施設や企業で作業や実習などを行い、職場探しや職場定着のための支援を受けたい」と回答した人の合計の割合。

図：仕事の形態（単数回答）



(2) 1 年間の収入の額

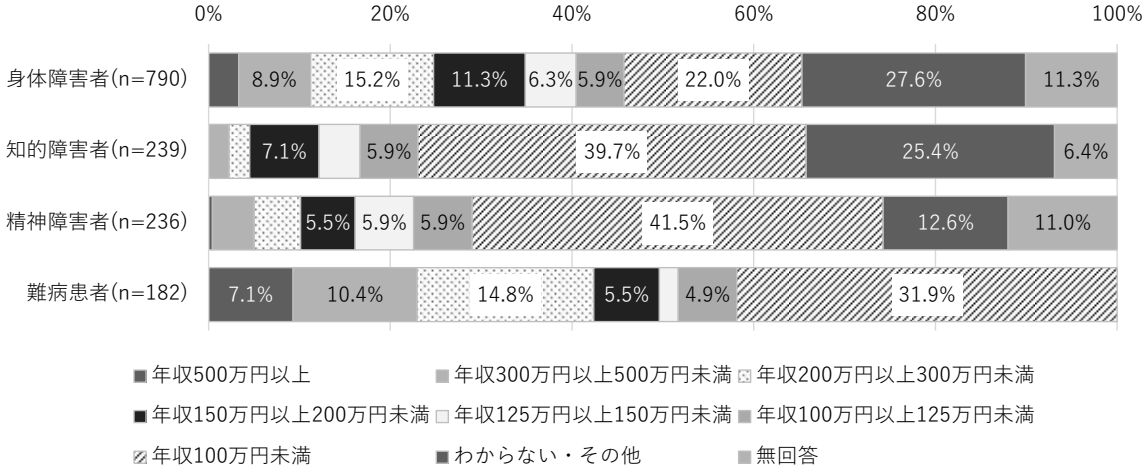
全ての種別で「年収 100 万円未満」が 2 割から 4 割で最多

【障害種別ごとの結果】

身体障害者では「100 万円未満」(22.0%)が最も多く、次いで「200 万円以上 300 万円未満」(15.2%)となっている。知的障害者、精神障害者では「100 万円未満」が、それぞれ 39.7%、41.5%と最も多くなっている。難病患者では「100 万円未満」が 31.9%と最も多く、次いで「200 万円以上 300 万円未満」(14.8%)、「300 万円以上 500 万円未満」(10.4%）となっている。

施設入所者、グループホーム入居者では「100 万円未満」がそれぞれ 45.1%、23.8%と最も多くなっている。高次脳機能障害者では、全体の 7 人中、「100 万円未満」が 2 人となっている。発達障害者では「100 万円未満」(49.3%)」が最も多く、次いで「125 万円以上 150 万円未満」(6.0%）となっている。

図：１年間の収入の額（単数回答）



(3) 生活を支える収入

全ての種別で「年金」や「障害年金」が１位又は２位

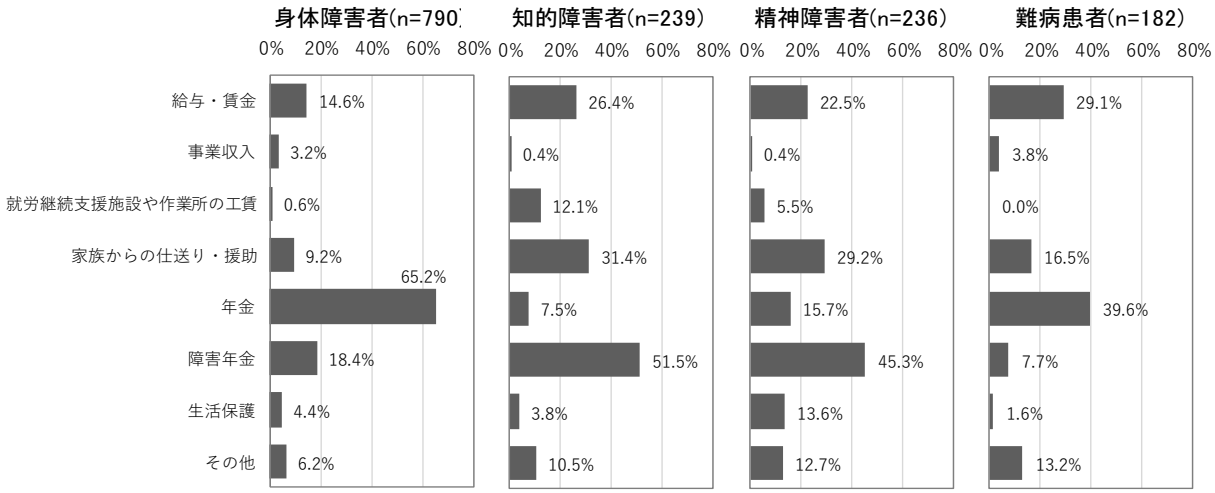
【障害種別ごとの結果】

身体障害者では「年金」(65.2%) が最も多くなっているが、18～64 歳では、40.4%の人が「給与・賃金」をあげている。知的障害者では、「障害年金」が 51.5%と最も多くなっているが、18～64 歳では、「障害年金」は 60.2%と更に多くなっている。精神障害者では、「障害年金」(45.3%) が最も多く、次いで「家族からの仕送り・援助」(29.2%)となっている。18～64 歳では、「障害年金」(51.1%) となっている。難病患者では、「年金」(39.6%) が最も多く、次いで「給与・賃金」(29.1%) となっている。特に 18～64 歳では、「給与・賃金」(51.2%) となっている。

施設入所者とグループホーム入居者では「障害年金」が最も多く、それぞれ 90.2%、48.8%となっている。高次脳機能障害者では、「給与・賃金」(7 人中 3 人) が最も多くなっている。

発達障害者では、「家族からの仕送り・援助」(47.8%) が最も多く、次いで「障害年金」(37.3%)、「給与・賃金」(29.9%) となっている。

図：生活を支える収入（複数回答）



H. 将来の希望

(1) 将来の生活に不安なこと

「病気になること」、「家族がいなくなること」が上位

「不安はない」は 5%未満

【障害種別ごとの結果】

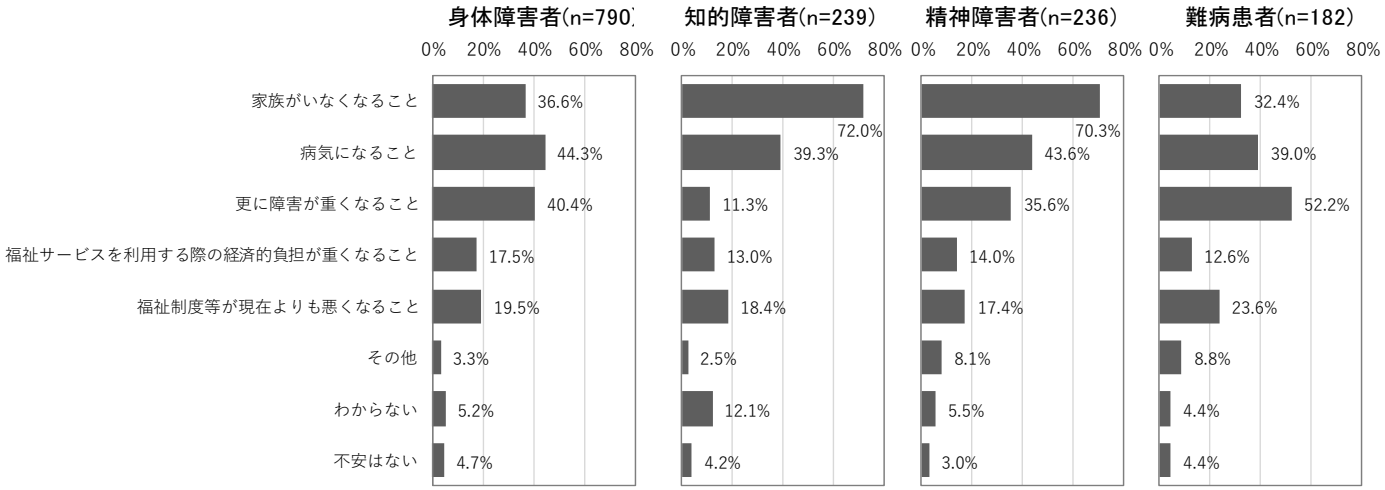
身体障害者では「病気になること」(44.3%)が最も多く、次いで「更に障害が重くなること」(40.4%)となっている。知的障害者では「家族がいなくなること」(72.0%)が最も多く、次いで「病気になること」(39.3%)となっている。精神障害者では「家族がいなくなること」(70.3%)が最も多く、次いで「病気になること」(43.6%)となっている。難病患者では「更に障害が重くなること」が 52.2%と最も多く、次いで「病気になること」(39.0%)となっている。

高次脳機能障害者では、「家族がいなくなること」、「更に障害が重くなること」がいずれも 7 人中 4 人で最も多くなっている。

発達障害者では「家族がいなくなること」(70.1%)が最も多く、次いで「病気になること」、「更に障害が重くなること」がいずれも 26.9%となっている。

「その他」に記載の内容では、経済的な問題が共通して多く、精神障害者や発達障害者では保証人がいない・いなくなるのではといった問題、知的障害者や発達障害者では結婚できるかどうか、難病患者では子どもが持てるかどうか、身体障害者では入所できる施設があるかなどがあげられている。

図：将来の生活に不安なこと（2 つまでの複数回答）



I. 相談・情報入手

(1) 相談状況・相談意向

最も多いのは「家族等の同居人」

発達障害者では「相談したいが、できない」1 割超

【障害種別ごとの結果】

「家族等の同居人」が身体障害者（65.1%）、知的障害者（66.9%）、精神障害者（66.9%）、難病患者（69.2%）とそれぞれ最も多くなっている。

また、「施設や作業所の職員」が知的障害者（21.8%）で 2 番目に多く、「病院・医師・看護師等」が身体障害者（20.1%）、精神障害者（47.9%）、難病患者（31.9%）とそれぞれ 2 番目に多くなっている。

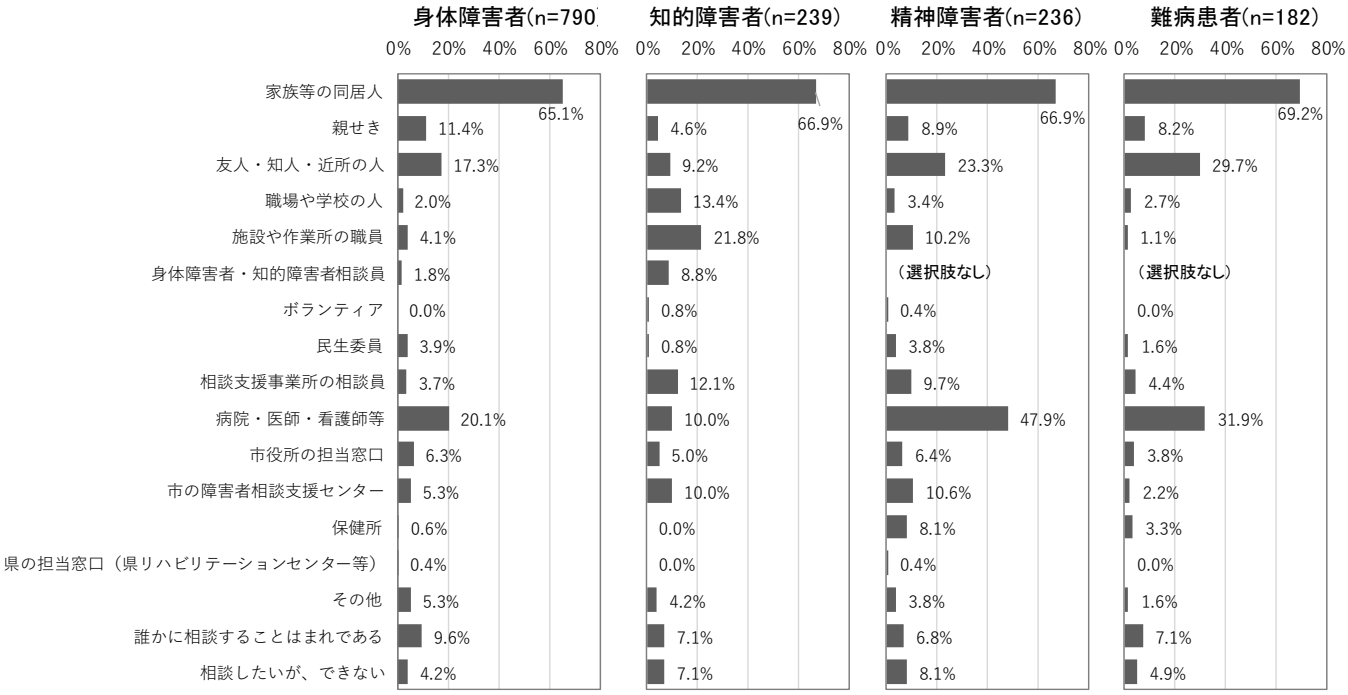
施設入所者では「施設の職員」が 81.1%と最も多く、次いで「家族・親族」（48.4%）となっている。

特別支援学校高等部 3 年生では、「家族等の同居人」（80.0%）が最も多く、次いで「職場や学校の人」（56.0%）となっている。

高次脳機能障害者では「家族等の同居人」（7 人中 4 人）、「親せき」、「施設や作業所の職員」、「病院・医師・看護師等」がそれぞれ 7 人中 2 人となっている

発達障害者では、「家族等の同居人」（79.1%）が最も多く、次いで「病院・医師・看護師等」（58.2%）となっている。

図：悩みや困ったことなどの相談先（複数回答）



(2) 情報入手・コミュニケーションで困ること

共通して上位なのは「どこに何を相談したらよいかわからない」 その他の内容は障害種別により様々

【障害種別ごとの結果】

身体障害者では「特に困ることはない」（34.2%）が最も多く、次いで「どこに何を相談したらよいかわからない」（16.6%）となっている。更に障害の種別にみると、視覚障害では「案内表示がわ

かりにくい」(31.0%)「音声情報が少ない」(29.3%)、聴覚障害では、「難しい言葉や早口で話されるとわかりにくい」(41.8%)、「文字情報が少ない」(27.8%) が多くなっている。

知的障害者では、「話をうまく組み立てられない、うまく質問できない」(43.5%)、「複雑な文章表現がわかりにくい」(41.8%) が多くなっている。

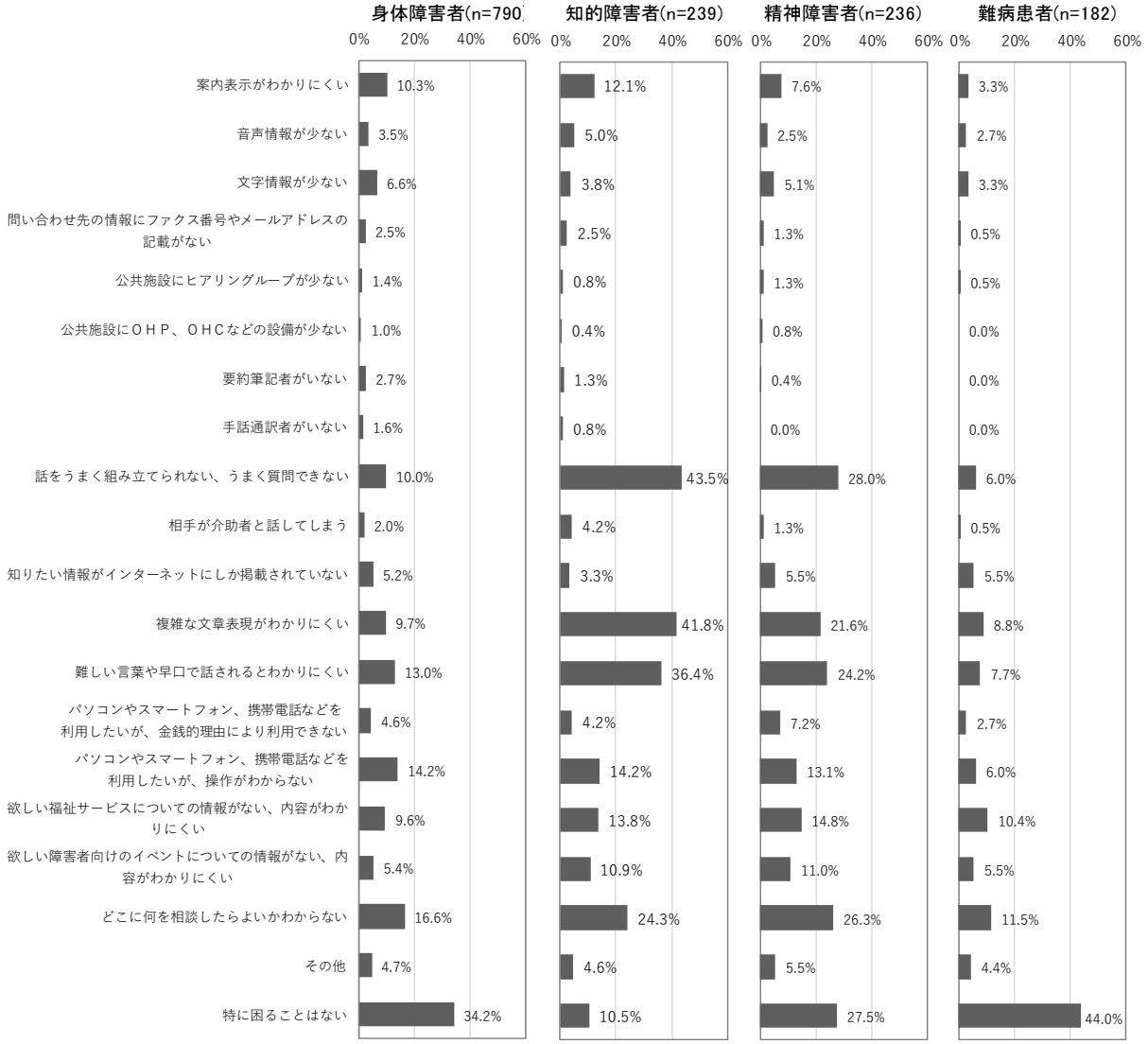
精神障害者では、「話をうまく組み立てられない、うまく質問できない」(28.0%)、「どこに何を相談したらよいかわからない」(26.3%)、「難しい言葉や早口で話されるとわかりにくい」(24.2%) が多くなっている。

難病患者では、「特に困ることはない」(44.0%) が最も多く、次いで「どこに何を相談したらよいかわからない」(11.5%)、「欲しい福祉サービスについての情報がない」(10.4%) となっているが、「特に困ることはない」(44.0%) が他の種別よりも多い。

高次脳機能障害者では全体の 7 人中、「案内表示がわかりにくい」、「話をうまく組み立てられない、うまく質問できない」、「複雑な文章表現がわかりにくい」、「難しい言葉や早口で話されるとわかりにくい」、「欲しい福祉サービスについての情報がない」がそれぞれ 3 人となっている。

発達障害者では、「話をうまく組み立てられない、うまく質問できない」(61.2%) が最も多く、次いで「難しい言葉や早口で話されるとわかりにくい」(52.2%)、「複雑な文章表現がわかりにくい」(38.8%) となっている。

図：情報の入手やコミュニケーションで困ること（複数回答）



(3) 福祉の手続きをすることが難しいと感じる場面

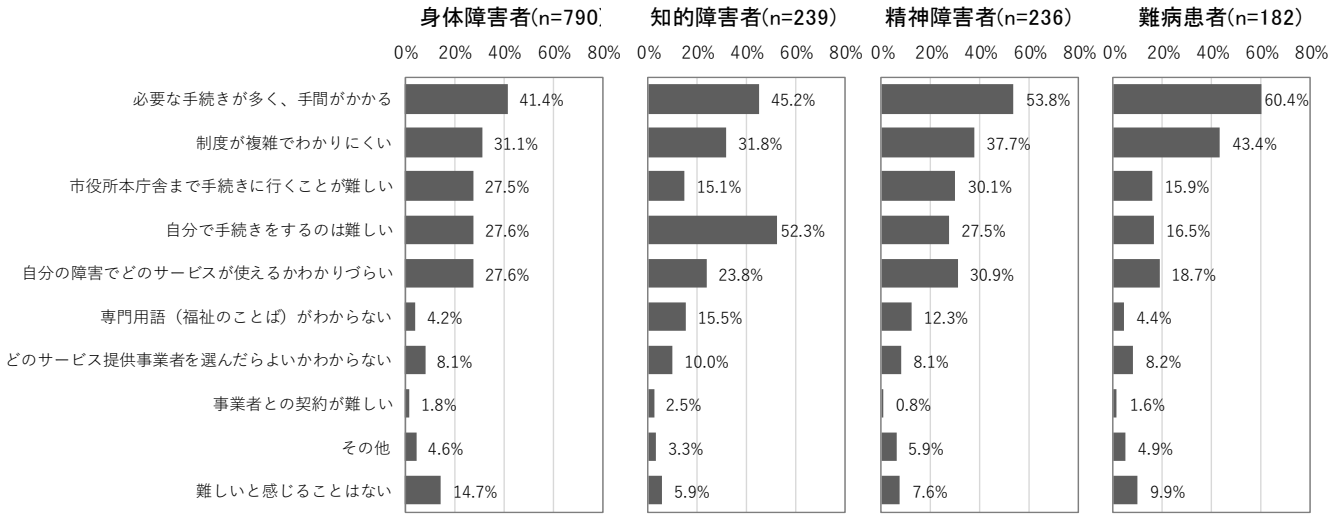
「必要な手続きが多く手間がかかる」が突出して１位

【障害種別ごとの結果】

種別による違いは小さい。いずれの種別においても、「必要な手続きが多く手間がかかる」、「制度が複雑でわかりにくい」、「どのサービスが使えるかわかりづらい」が上位を占めている。

また、知的障害者では 52.3%、発達障害者では 44.8%が「自分で手続きすることは難しい」と回答している。

図：福祉の手続きが難しいと感じる場面（３つまでの複数回答）



(4) 福祉の手続きを行っている方

「自分」は身体障害者、精神障害者、難病患者に多い

「父・母」は知的障害者、特別支援学校生、高次脳機能障害者、発達障害者に多い

【障害種別ごとの結果】

身体障害者では「自分」(46.7%) が最も多く、次いで「配偶者」(33.3%)、知的障害者では「父・母」(79.1%) が最も多く、次いで「兄弟姉妹」(12.6%)、精神障害者では「自分」(63.6%) が最も多く、次いで「父・母」(28.8%)、難病患者では「自分」(57.1%) が最も多く、次いで「配偶者」(23.6%) となっている。

特別支援学校高等部 3 年生では「父・母」(96.0%) が最も多くなっている。

高次脳機能障害者では「父・母」(7 人中 3 人) が最も多くなっている。

発達障害者では「父・母」(64.2%) が最も多く、次いで「自分」(50.7%) となっている。

J．福祉サービス

(1) 福祉サービスの利用状況と今後の利用意向

現在の利用が比較的多いのは、「補装具費の支給」（身体・難病）、「計画相談支援」（知的）、「自立支援医療」（精神）
今後の利用希望が現在の利用状況よりも特に伸びているのは、「施設入所支援」（知的）、「共同生活援助」（知的）と「基本相談支援」（知的、精神）

【障害種別ごとの結果】

身体障害者の利用状況は「補装具費の支給」（15.6%）が最も多く、次いで「居宅介護（ホームヘルプサービス）」（8.0%）となっている。今後の利用意向では「補装具費の支給」（26.8%）が最も多く、次いで「居宅介護(ホームヘルプサービス)」（23.8%）となっている。

知的障害者の利用状況は「計画相談支援」（18.0%）が最も多く、次いで「生活介護」、「就労継続支援 B 型」がいずれも 9.6%となっている。今後の利用意向では「計画相談支援」（25.6%）が最も多く、次いで「共同生活援助（グループホーム）」（23.4%）となっている。

精神障害者の利用状況は「自立支援医療（更生・育成・精神通院）」（51.3%）が最も多く、次いで「居宅介護（ホームヘルプサービス）」（9.3%）となっている。今後の利用意向では「自立支援医療（更生・育成・精神通院）」（44.1%）が最も多く、次いで「基本相談支援」（24.6%）となっている。

難病患者の利用状況は「補装具費の支給」（9.9%）が最も多く、次いで「日常生活用具費の支給」、「地域活動支援センター」がいずれも 6.6%となっている。今後の利用意向では「居宅介護（ホームヘルプサービス）」（23.1%）が最も多く、次いで「日常生活用具費の支給」（22.5%）となっている。

施設入所者の利用状況は、「施設入所支援」を除いて「生活介護」（57.4%）が最も多くなっている。今後の利用意向では、「施設入所支援」を除いて「生活介護」（43.4%）が最も多くなっている。

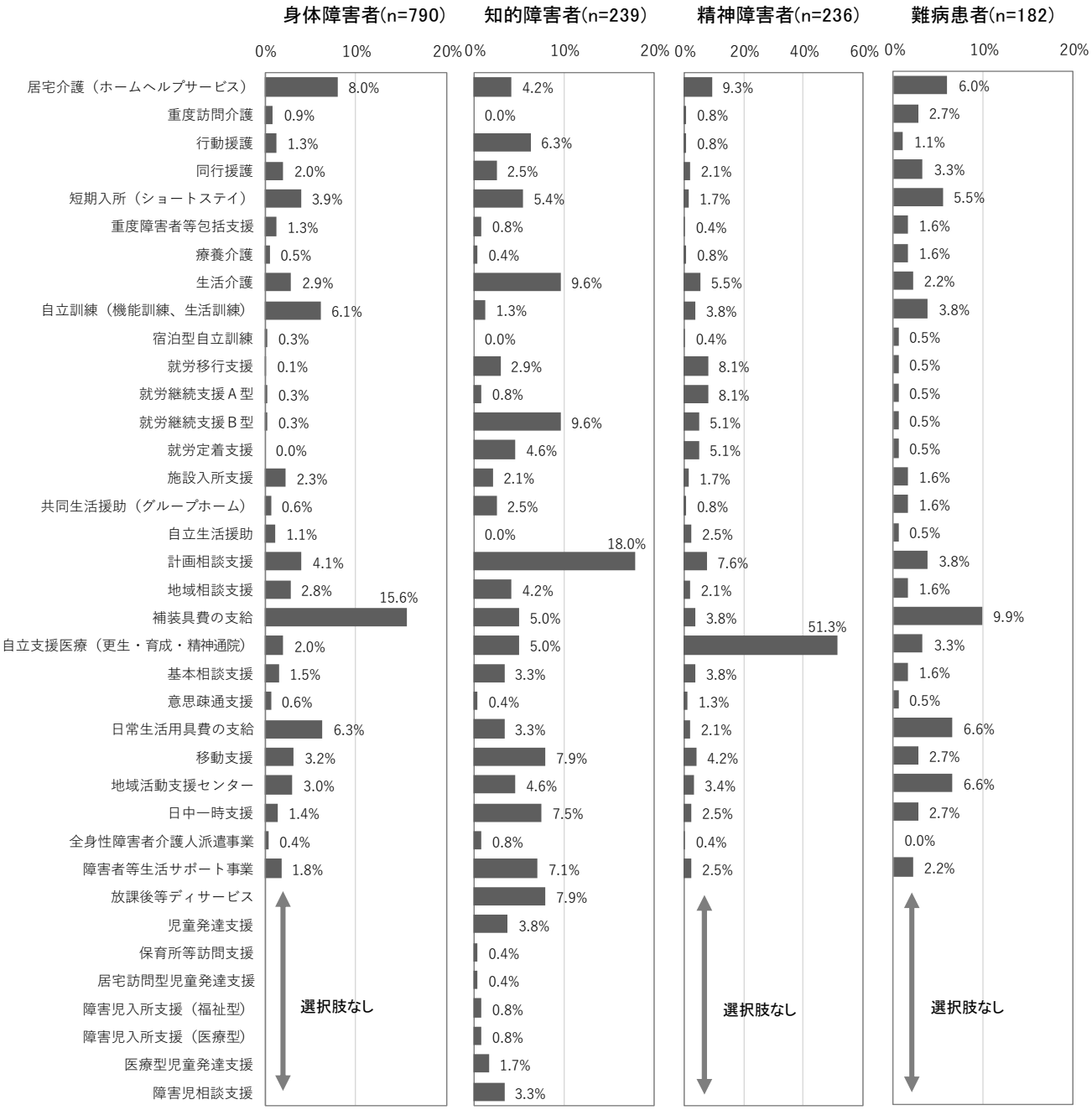
特別支援学校高等部 3 年生の利用状況は「就労移行支援」（20.0%）が最も多く、次いで「短期入所（ショートステイ）」、「計画相談支援」がいずれも 12.0%となっている。今後の利用意向では「就労定着支援」、「計画相談支援」がいずれも 32.0%と最も多くなっている。

グループホーム入居者の利用状況は「共同生活援助（グループホーム）」を除いて「計画相談支援」（45.2%）が最も多くなっている。今後の利用意向では「共同生活援助（グループホーム）」を除いて「生活介護」、「計画相談支援」がいずれも 27.4%と最も多くなっている。

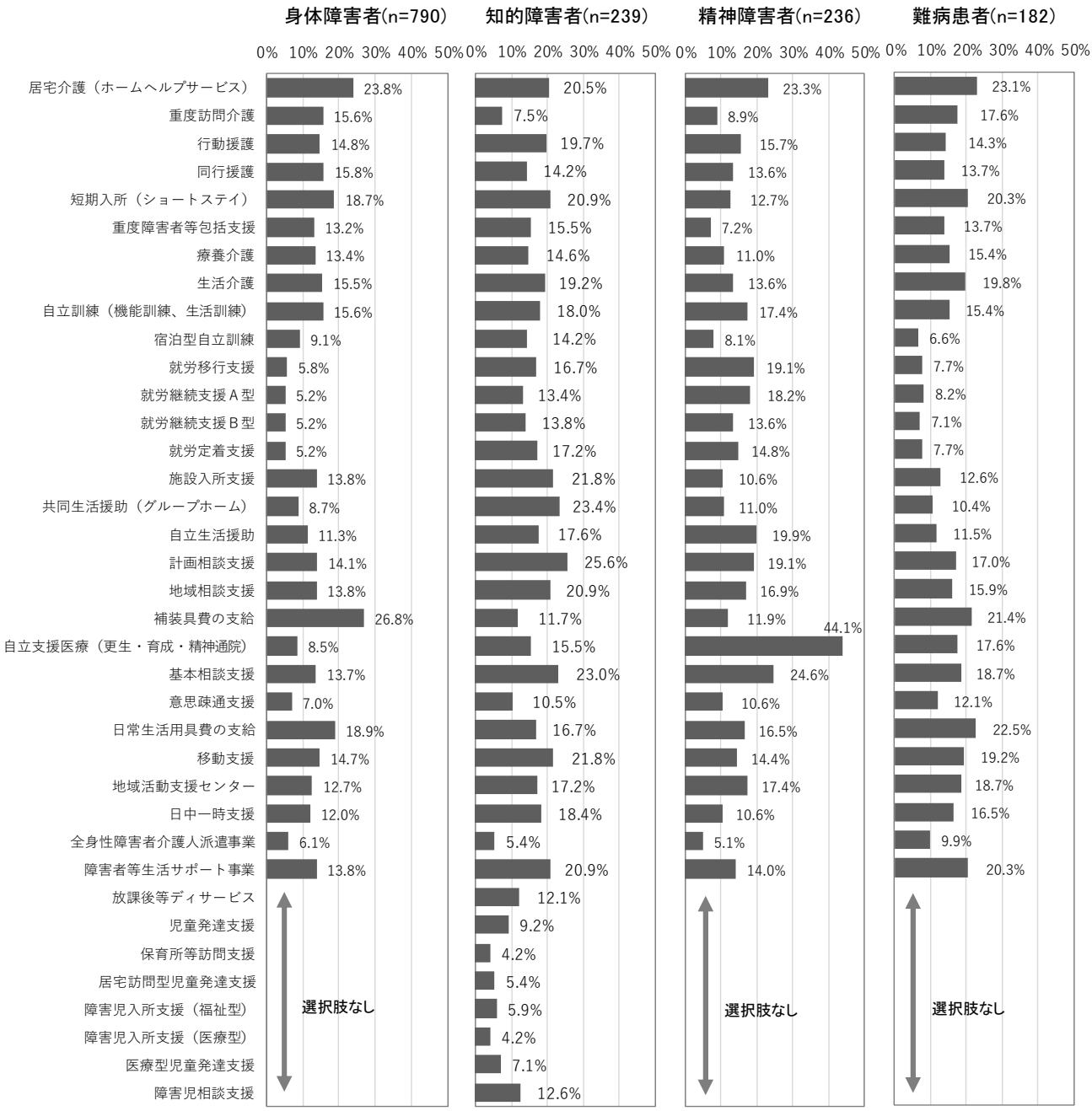
高次脳機能障害者の利用状況は「自立支援医療」（7 人中 3 人）が最も多く、次いで「居宅介護（ホームヘルプサービス）」、「就労移行支援」がいずれも 2 人となっている。今後の利用意向では「計画相談支援」（3 人）が最も多く、次いで「就労定着支援」、「自立生活援助」がいずれも 2 人となっている。

発達障害者の利用状況は、「自立支援医療（更生・育成・精神通院）」（68.7%）が最も多く、次いで「就労移行支援」（20.9%）となっている。今後の利用意向では「自立支援医療（更生・育成・精神通院）」（62.7%）が最も多く、次いで「就労移行支援」（37.3%）となっている。

図：福祉サービス利用状況（知っていた、「現在利用している」割合）



図：福祉サービスの利用意向（「今後利用したい」割合）



利用状況の割合と利用意向の割合の差をポイントとして表すと、障害によってその数の高いサービスは異なり、身体障害者では「居宅介護（ホームヘルプサービス）」(15.8)、知的障害者では「共同生活援助（グループホーム）」(20.9)、精神障害者では「基本相談支援」(20.8)、難病患者では「障害者等生活サポート事業」(18.1）がそれぞれ１位となっている。このうち「基本相談支援」は、知的障害者で２位、難病患者で３位と、比較的共通し今後の利用が見込まれていることがみてとれる。

身体障害者

居宅介護（ホームヘルプサービス）	15.8
短期入所（ショートステイ）	14.8
重度訪問介護	14.7
同行援護	13.8
行動援護	13.5

知的障害者

共同生活援助（グループホーム）	20.9
施設入所支援	19.7
基本相談支援	19.7
自立生活援助	17.6
自立訓練（機能訓練、生活訓練）	16.7
地域相談支援	16.7

精神障害者

基本相談支援	20.8
自立生活援助	17.4
行動援護	14.8
地域相談支援	14.8
日常生活用具費の支給	14.4

難病患者

障害者等生活サポート事業	18.1
生活介護	17.6
居宅介護（ホームヘルプサービス）	17.0
基本相談支援	17.0
移動支援	16.5

K. 災害対策

(1) 災害時の避難ができるかについて

災害時の避難ができるかについては、障害の種別だけでなく、種類や等級により大きな違い

【障害種別ごとの結果】

身体障害者全体では「１人でできる」（37.7%）が最も多いが、平衡機能障害は 0%、肢体不自由（脳原性）は 14.3%に留まっている。「できない」は全体では 17.2%であるが、平衡機能障害では 54.5%に達している。

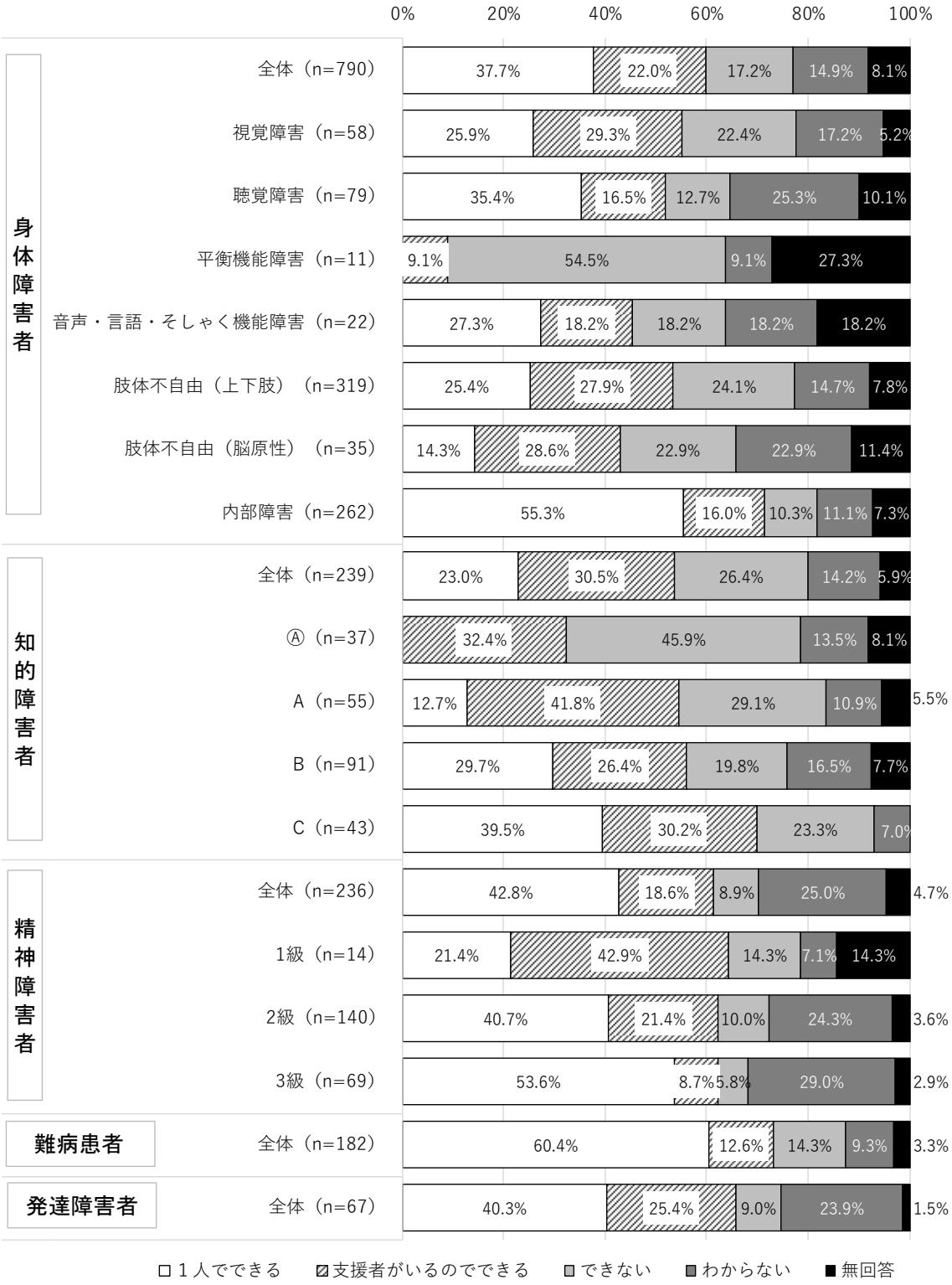
知的障害者全体では「１人でできる」は 23.0%であるが、程度がＣであれば 39.5%となっている。「できない」は全体では 26.4%であるが、Ⓐでは 45.9%となっている。

精神障害者全体では「１人でできる」（42.8%）が最も多いが、1 級は 21.4%となっている。

難病患者では「１人でできる」（60.4%）が最も多く、次いで「できない」（14.3%）となっている。

特別支援学校高等部 3 年生では「支援者がいるのでできる」（36.0%）が最も多く、次いで「できない」（24.0%）となっている。グループホーム入所者では「支援者がいるのでできる」（48.8%）が最も多く、次いで「1 人でできる」（19.0%）となっている。高次脳機能障害者では「1 人でできる」、「支援者がいるのでできる」がいずれも 7 人中 2 人となっている。発達障害者は、避難が「1 人でできる」（40.3%）が最も多く、次いで「支援者がいるのでできる」（25.4%）となっている。

図：災害時に避難できるか（単数回答）



避難が「できない」と回答した人があげた理由は、身体障害者では「支援者がいない」（33.8%）が最も多く、次いで「避難が必要かどうかわからない」（30.1%）、「避難所がわからない」（25.0%）となっている。

知的障害者では「避難が必要かどうかわからない」（57.1%）が最も多く、次いで「支援者がいない」（33.3%）、「避難所がわからない」（31.7%）となっている。

精神障害者では「避難が必要かどうかわからない」（52.4%）が最も多く、次いで「避難所がわからない」（47.6%）となっている。

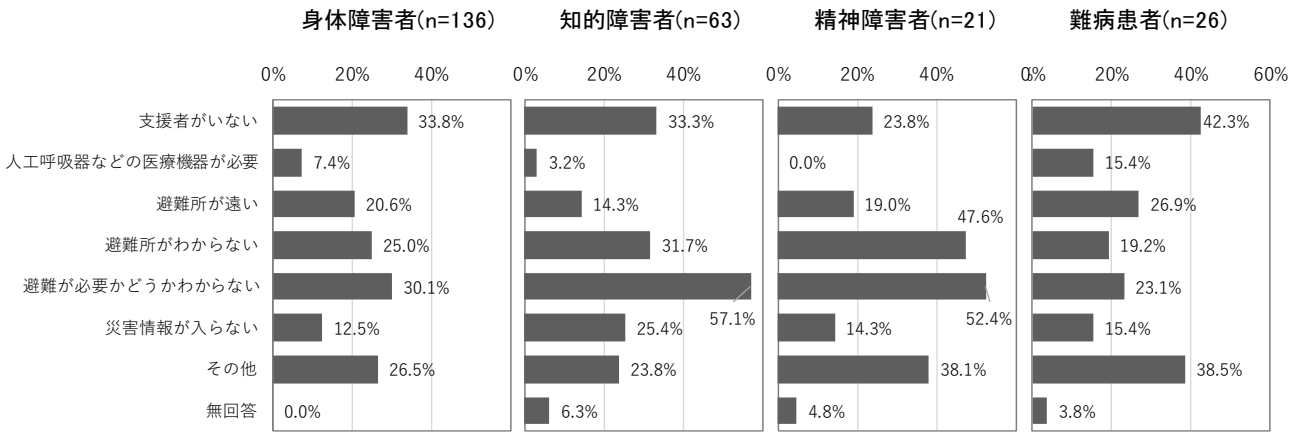
難病患者では「支援者がいない」（42.3%）が最も多く、次いで「避難所が遠い」（26.9%）となっている。

特別支援学校高等部 3 年生では 6 人中 5 人が「避難が必要かどうかわからない」と回答している。

発達障害者では 6 人中 3 人が「避難所がわからない」、「避難が必要かどうかわからない」と回答している。

その他では、「足が悪く歩けない」（身体、難病）、「避難所の設備が整っていない」（身体）、「人工透析」（身体）、「複数の障害者がいる」（身体）、「易感染のため大勢集まるところはリスク」（身体）、「騒いでしまう、パニックになる」（知的、精神、発達）などがあげられている。

図：災害時に避難できないと思う理由（複数回答）



(2) 災害時に必要とする支援

ほぼ全ての種別で「必要な投薬や治療を受けられる」が 1 位

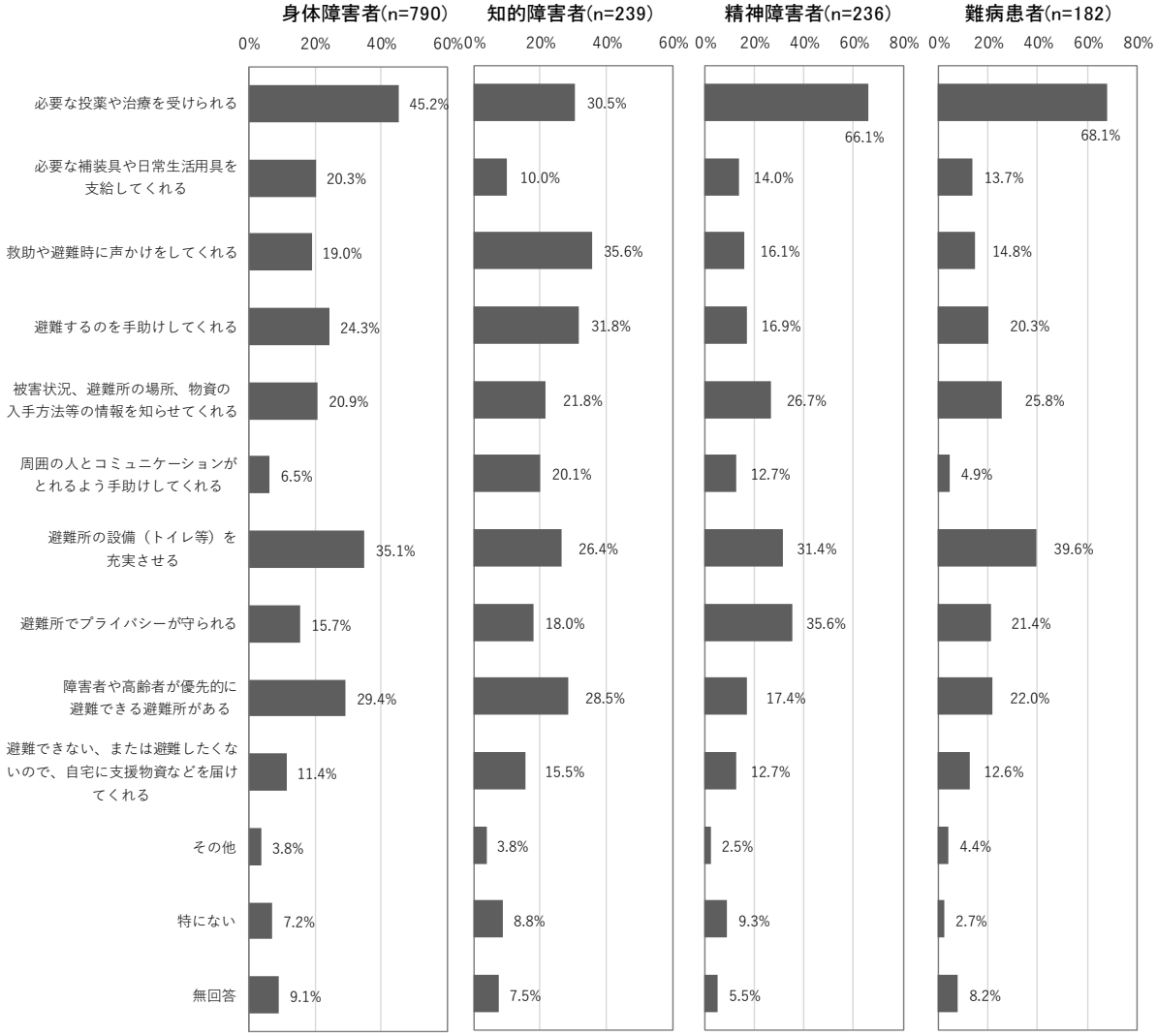
【障害種別ごとの結果】

身体障害者では、「必要な投薬や治療が受けられる」（45.2%）が最も多く、知的障害者では「救助や避難時に声かけをしてくれる」（35.6%）が最も多く、次いで「避難するのを手助けしてくれる」（31.8%）となっており、「必要な投薬や治療が受けられる」（30.5%）は 3 位である。

精神障害者、難病患者、高次脳機能障害者、発達障害者も「必要な投薬や治療が受けられる」が最も多く、それぞれ 66.1%、68.1%、（7 人中 5 人）、52.2%と高い割合となっている。

また、全ての障害種別で「避難所の設備（トイレ等）を充実させる」が上位にあげられている。

図：災害時にあるとよい支援・援助（３つまでの複数回答）



L. 差別・疎外感

(1) 差別・疎外感を感じること、その場面

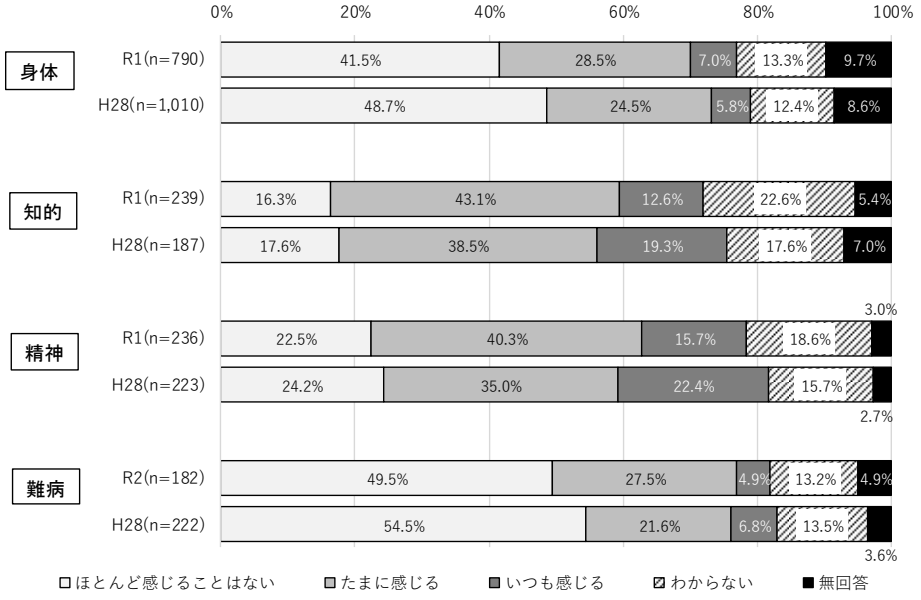
差別を感じる割合が多いのは知的障害者、精神障害者、特別支援学校生、発達障害者 「ほとんど感じることはない」は平成 28 年度調査からやや低下

【障害種別ごとの結果】

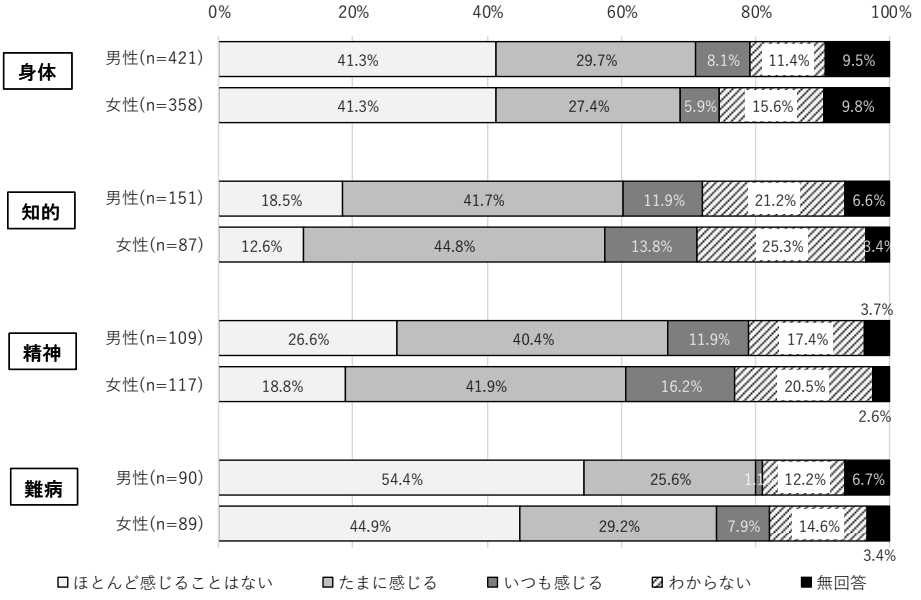
身体障害者、難病患者、高次脳機能障害者では、障害があることによる差別や疎外感を「ほとんど感じることはない」がそれぞれ 41.5%、49.5%、7 人中 3 人で最も多くなっている。知的障害者、精神障害者、特別支援学校高等部３年生、発達障害者では「たまに感じる」がそれぞれ43.1%、40.3%、48.0%、53.7%で最も多くなっている。

施設入所者とグループホーム入居者では「わからない」がそれぞれ 68.9%と 52.4%で最も多くなっている。

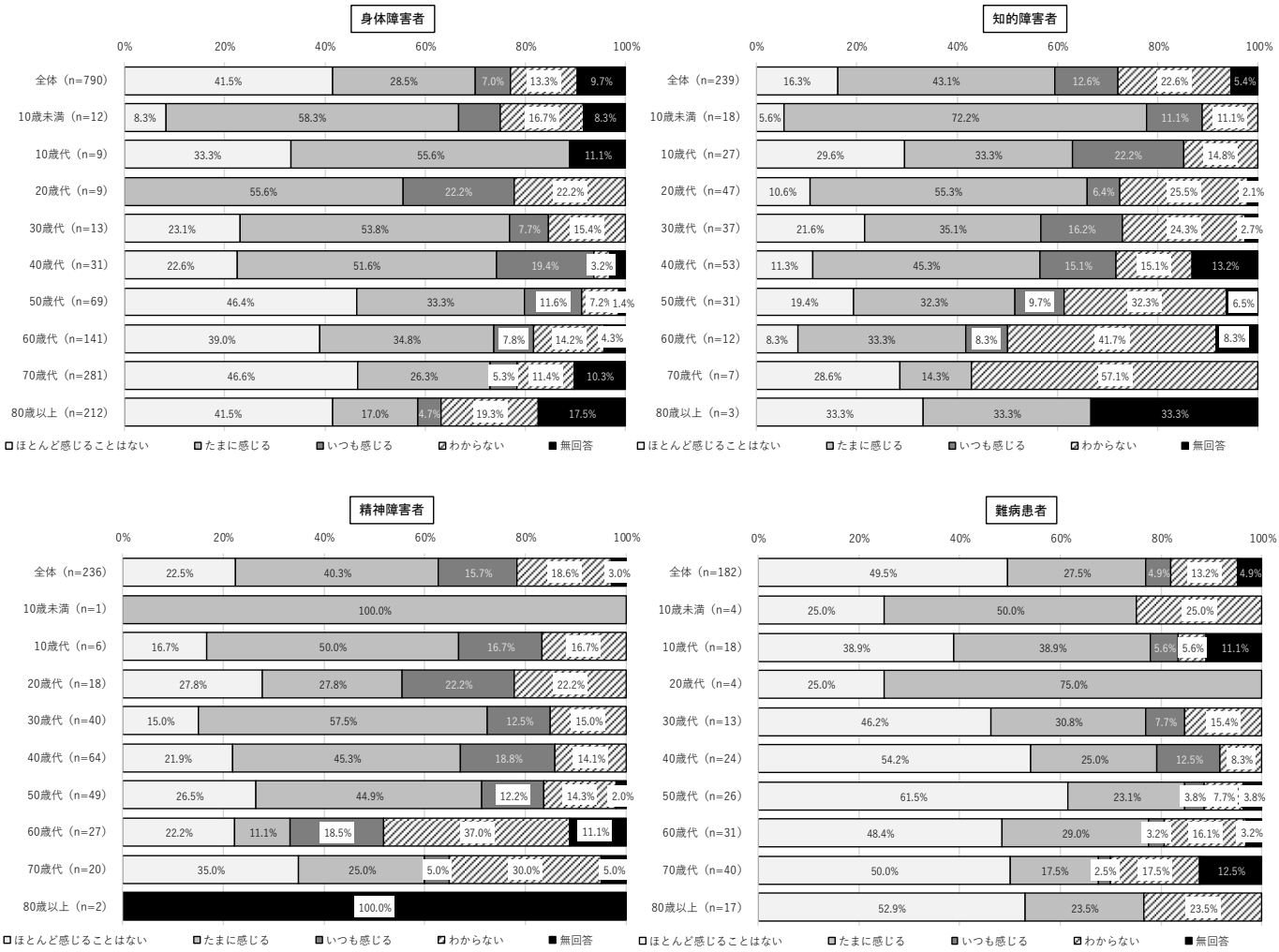
図：障害があることによる差別や疎外感（単数回答）



図：障害があることによる差別や疎外感（単数回答）【性別】



図：障害があることによる差別や疎外感（単数回答）【年代別】



どのような時に差別を感じるかについては、「日常生活で（他人の視線を感じる／心ない言葉を受ける／障害に対する誤解がある等）」を身体障害者、知的障害者、精神障害者、難病患者、施設入所者、グループホーム入居者、発達障害者で最も多くあげている。

高次脳機能障害者では、8 人中 3 人が「人との交流の場で（話の輪に入れない・活動に参加できない等）」をあげている。

なお、「人との交流の場で（話の輪に入れない・活動に参加できない等）」については、身体障害者、知的障害者、精神障害者、グループホーム入居者で最も多く、特別支援学校高等部 3 年生及び発達障害者も 2 位にあげている。

その他の記載では、身体障害者では「病院や店での支払い」、「タクシー券の利用時」、「内部障害のため、普通に見られるとき」など、精神障害者では「人と同じことができない時」、グループホーム入居者では「ヘルプマークをつけていても配慮されない時」、「点字の資料がなく、情報を平等に得ることができない時」、高次脳機能障害者では「健常者と同じペースで行動できない時」、発達障害者では「周りとの違いを自分で感じた時」などがあげられている。

（2）障害のある方への配慮として良いと思ったことや配慮があって助かったこと、あると良い合理的配慮

【自由記述の内容】

記述式で回答いただいた具体的な内容の主なものについて、川越市障害者支援計画（平成 30 年３月発行）の基本目標に沿って分類すると以下のようになる。

【地域共生社会の実現】

・病院へバスで通院した時、杖をついていた私を見てバスの運転手さんが「身体の不自由な方が乗車されました。どなたか席を譲りましょう。」とマイクで放送してくれすぐに席を譲ってくれた人がいて助かりました。バスの運転手さんに感謝です。
・声掛けあり一番うれしい！
・ある意味無関心でいて欲しい時もある。心ない言葉や、さける行動をとられるより、まだほっといてもらった方がいい時もあるように思う。
・電車に乗ってペースメーカーに異変を感じ事情を話し後ろの携帯電話を持っていた人が快く切ってくれた。嬉しかった。
・自信がなくて自治会の当番や役員を引き受けられないので免除してもらえて助かっている。
・挨拶が返ってくることが嬉しい。
・横断歩道で、途中で信号が変わってしまった時、自動車やバイクが待ってくれたこと。
・公共の乗り物で席を譲られた。
・仕事中、具合が悪くなった時、休憩させてもらえるのが助かっている。体調が悪く遅刻か早退をさせてもらえることも助かっている。
・障害者トイレのドアは大体が重く勝手に閉まるため辛い。見ていた方に助けられた（ドアを開けてくれた）嬉しかった。
・難病、障害があっても見た目は普通なので一緒の行動が出来ると勘違いされる。自分の言葉だけでは限度がある。説明するのに手助けしてくれるようなことがあったらいいと思う。
・会話をする時に、車いすの目線に合わせてくれる人がいる。
・凄いと思うのはあるテーマパークでの経験で、スタッフが階段などの乗り物でさっと手を出してくれる、など動きを見て行動に移せるのはすごいです。そんな教育も学校などであっても良いかなと思う。やりたいけど色々考えてしまい止めてしまうことが多い気がします。公で行動となど教えたら自然に出来る事増えるかもしれない。受ける方も自然に受けられると思う。
・メモを書く事！筆談します！
・障害者に対して、適度に話しかける、嫌いというような態度を見せない。説明するときは細かく伝える、分かった？と聞いてあげる。
・動きで分かるのかイスを勧めてくれる。
・大学で自分の障害について開示したところ心理の先生をはじめ、多くの人が助けて下さったおかげで無事卒業することができた。
・教習所で私が障害を持っているにも関わらず普通に扱ってくれた。

【保健・医療サービスの充実】

・筆談を丁寧にしてくれるなど。特に病院などで（先生によっては迷惑だと言われたこともありました）。
・うつ病で服薬していたのですが、笑顔が素敵で励ましの言葉を下さったおかげで元気になった。

【早期療育及び学習機会の充実】

・ぼくのような病気を持っていても、普通の高校入学が可能な学校が増えてくれる事をのぞみます。
・某高校の学食に作業所がやっていると聞きました。高校生はお腹がすいているので必ず食べると思いますので売上はもちろんのこと関わりも持てる機会になると思いました。学生にとっては共生社会を学んだり将来福祉の世界にも関心をもっていただけたらと思います。

【雇用・就労の促進】

・上司が精神保健福祉士の免許を所持しており、そのおかげで自分にどのような配慮をしてもらったら長く働き続けられるのかを理解していたこと。
・障害者と会社の間に入ってサポートをしてくれる企業があり、現在そのような形で働いている。会社と障害者という関係では理解がないと長く働くことは難しいと思う。
・就職活動は無事内定を頂いたが、職員の言葉があったから頑張れた。とても感謝している。彼らのように頑張りたいと思っている。
・【職場】同じ病名でも苦手なことや得意なことは人により多様な為、病名で行動を制限するのではなく、個人の特性を見て適した業務に挑戦できるような体制があるといいと思う。

【住みよい福祉のまちづくり】

・外出したときの階段の昇降のサポート。
・大げさではなくさりげない配慮。下のお世話等で生々しい言葉ではなく、可愛らしい言葉を使用する。
・私は視野が狭く階段は苦手ですが、駅など段鼻の部分がテープやゴム等で色分けされたものが増え、踏み外しにくくなり助かっています。
・災害時の避難などで近くの学校は体育館が２階であるため行くことは不可。車イスＯＫの場所指定があると良い。
・多目的トイレはあるが使い勝手が悪いので利用者が使う事を考え広さ手すりの付け方を考えてほしい。
・バスは優先席の表示にヘルプマークがないため席を譲ってもらえません。ある鉄道の優先席にはヘルプマークがあるので助かっています。

【福祉サービスの充実】

・情報過多で注意力が散ることを防ぐための配慮をしてもらえると助かります。
・タクシーを降りる時玄関や目的地の入口まで誘導して欲しい。

M.　成年後見制度

(1) 成年後見制度の認知度と利用意向

成年後見制度を「知っている」は、最も高い身体障害者、難病患者でも 3 割程度
※7 人中 4 人が「知っている」と回答した高次脳機能障害者を除く
将来の利用意向は発達障害者が最も多く 46%

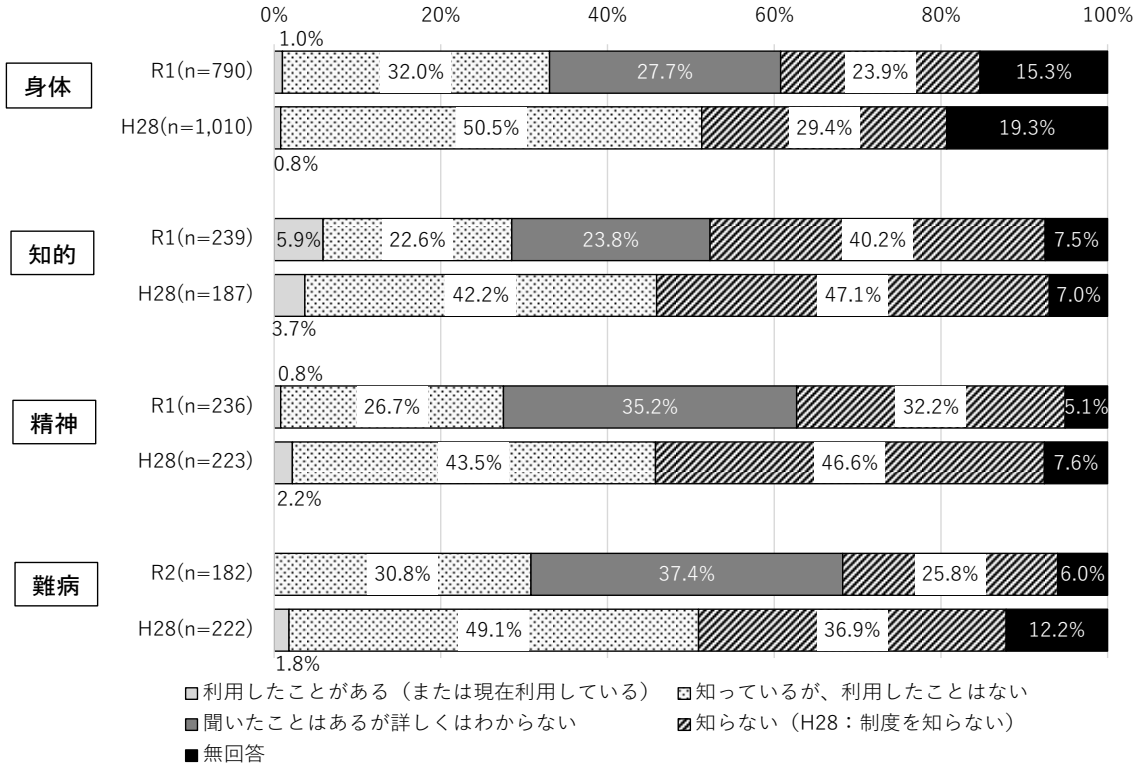
【障害種別ごとの結果】

「成年後見制度を利用したことがある（または現在利用している）」が比較的多いのは、知的障害者（5.9%）と施設入所者（7.4%）で、その他の種別では 0.0%～1.0%台である。

選択肢は一部異なる（※）が、平成 28 年度調査と比較すると、施設入所者とグループホーム入居者を除く全ての種別で「知らない」の割合は減少しており、認知は徐々に進んでいることがうかがえる。

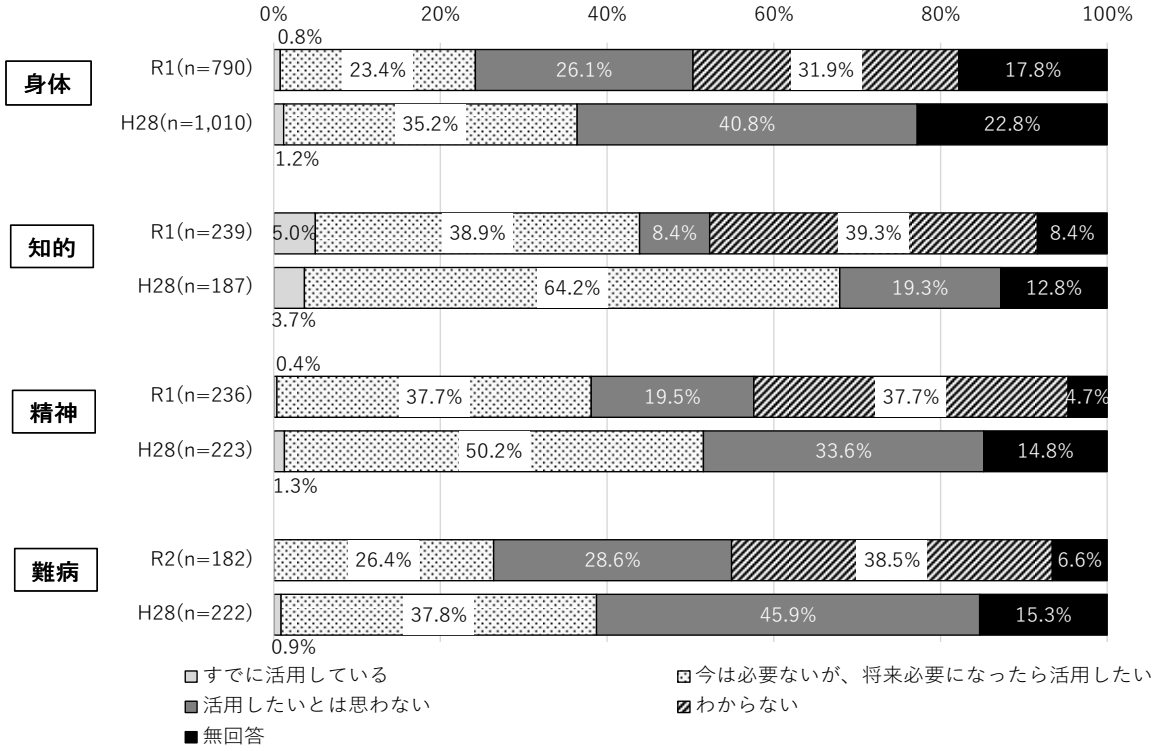
また、利用意向として「今は必要ないが、将来必要となったら活用したい」と考えている人が、身体障害者では 23.4%、知的障害者では 38.9%、精神障害者では 37.7%、難病患者では 26.4%、施設入所者では 27.9%、グループホーム入居者では 23.8%、高次脳機能障害者では 7 人中 4 人、発達障害者では 46.3%となっている。

図：成年後見制度の認知度（単数回答）



※H28 の調査では「聞いたことはあるが詳しくはわからない」の選択肢を設けていない。また「知らない」に対応する H28 の選択肢は「制度を知らない」となっている。

図：成年後見制度の利用意向（単数回答）



※H28 の調査では「わからない」の選択肢を設けていない。

N. 施設入所の状況

(1) 施設生活の満足度と施設への要望　【施設入所者】

現在、入所している施設の生活に「非常に満足」している人は 21.3%、「やや満足」している人は 28.7%で、合計すると 50.0%の人は概ね満足している。

また、入所している施設への要望（複数回答）としては、「余暇活動の充実」（43.4%）が最も多く、次いで「外出機会の増加」（41.0%）、「日中活動の充実」（29.5%）となっている。

(2) 施設入所者が将来希望する生活　【施設入所者】

将来、生活してみたいところ（単数回答）としては、「現在入所している施設で生活したい」（73.8%）が最も多くなっている。「施設を退所して、家族と一緒に生活したい」は 6 人（4.9%）となっている。

また、現在入所している施設で生活を続けたいと回答した人の理由（複数回答）としては、「施設にいたほうが安心できるから」（77.8%）が最も多く、次いで「施設での生活が自分にあっているから」（41.1%）、「施設職員やほかの入所者との関係が良好だから」（27.8%）となっている。

O. 学校卒業後

(1) 特別支援学校高等部 3 年生が将来希望する生活　【特別支援学校高等部 3 年生】

学校卒業後の日中の過ごし方についての希望（複数回答）としては、「すぐに一般企業などで働きたい」（36.0%）が最も多く、次いで「事業所（施設）内や企業において作業や実習、適性にあった職場探しや就労後の職場定着のための支援を受けたい」（32.0%）、「一般企業などで働くことはむず

かしいが、働きたいと思っているので、事業所（施設）内で働いたり、生産活動をしながら過ごしたい」（28.0%）となっている。

将来の暮らしについては、「自宅で家族といっしょに暮らしたい」（76.0%）が最も多く、「アパートなどで一人で暮らしたい」、「夜間や休日、介護や日常生活の援助を受けながら共同生活する住居で暮らしたい」がいずれも 8.0%となっている。

P. 行政への要望等

(1) 市が充実させていけば良いと思うこと

施設入所者を除き、「経済的な援助の充実」が 1 位又は 2 位

【調査結果から読み取れること】

市が充実させていけば良いと思う障害者施策として、多くの種別が 1 位又は 2 位にあげたのは「経済的な援助の充実」で、施設入所者を除き 2 割から 4 割台の回答となっている。そのほかの施策についての回答の割合は種別により様々であるが、3 位までにあげられた数では「暮らしやすいまちづくり（道路の段差解消、点字ブロックの整備、案内表示等）」（身体障害者、難病患者、施設入所者、高次脳機能障害者）、「在宅福祉サービスの充実（ホームヘルプ、入浴、外出支援等）」（身体障害者、難病患者、グループホーム入居者）、「地域で生活できる住宅の整備（グループホーム、生活ホーム等）」（知的障害者、特別支援学校高等部 3 年生、グループホーム入居者）、「働く機会の充実（職業訓練の実施、働く場の確保等）」（精神障害者、特別支援学校高等部 3 年生、発達障害者）が多くなっている。

【障害種別ごとの結果】

市が充実させていけば良いと思うこととして、身体障害者、知的障害者、精神障害者、難病患者、高次脳機能障害者では「経済的な援助の充実（医療費の補助、手当・年金の拡充等）」、施設入所者では「入所施設の整備」、グループホーム入居者では「地域で生活できる住宅の整備」、発達障害者では「働く機会の充実」がそれぞれ最も多くなっている。「経済的な援助の充実」については、グループホーム入居者と発達障害者でも 2 位にあげられている。

「その他」に記載された内容では、身体障害者から「施設の人材育成」、「リハビリ施設」、知的障害者から「訪問による現状確認」、「市職員のきめ細かな対応」、「特別支援学校・学級の先生や支援員」、精神障害者から「手続きの簡素化、電話や郵送でできるように」、「自宅～職場の送迎」、「サービスを利用しやすくする」、「介助者の相談、支援の場所」、「生活保護」、「精神障害への身体障害、知的障害並みの理解と優遇」、難病患者から「親身に相談対応してくれる場」、「毎年の福祉（サービス）に関する冊子」、特別支援学校高等部 3 年生から「手続きの係員の増員、手続きの簡素化」、発達障害者から「アニマルセラピーの推進」、「親が亡くなったのちの生活のサポート」、「ひきこもりの人たちの居場所作り、ひきこもりの子を持つ親への支援」、「手帳や特別乗車証の小型化」、「障害者支給金」などがあげられている。

図：市が充実させていけばよいと思う障害者施策（５つまでの複数回答）

項目	身体障害者（n=790）	知的障害者（n=239）	精神障害者（n=236）	難病患者（n=182）	施設入所者（n=122）	特別支援学校高等部（n=25）	グループホーム入居者（n=84）	高次脳機能障害者（n=7）	発達障害者（n=67）
在宅福祉サービスの充実	25.4%	14.2%	13.1%	24.2%	8.2%	8.0%	23.8%	28.6%	7.5%
在宅の給食サービスの充実	18.4%	10.9%	14.4%	21.4%	0.8%	8.0%	3.6%	28.6%	4.5%
入所施設の整備	16.1%	28.0%	10.2%	12.6%	52.5%	12.0%	14.3%	0.0%	7.5%
通所施設の整備	10.4%	14.2%	5.9%	10.4%	17.2%	0.0%	13.1%	14.3%	9.0%
保健医療サービスの充実	15.3%	9.2%	7.6%	20.9%	14.8%	0.0%	8.3%	28.6%	11.9%
自立のための訓練	10.3%	13.8%	10.2%	11.0%	4.9%	12.0%	9.5%	14.3%	23.9%
住宅の整備・改造のための支援	16.3%	7.5%	6.8%	17.6%	2.5%	8.0%	7.1%	14.3%	4.5%
地域で生活できる住宅の整備	7.0%	24.3%	10.6%	8.8%	15.6%	32.0%	41.7%	0.0%	9.0%
暮らしやすい街づくり	26.3%	11.7%	11.9%	24.2%	17.2%	12.0%	15.5%	42.9%	10.4%
療育・保育・教育の質の向上	2.0%	13.4%	3.8%	6.6%	7.4%	12.0%	1.2%	0.0%	7.5%
働く機会の充実	8.1%	18.0%	25.8%	15.9%	6.6%	28.0%	10.7%	42.9%	43.3%
一般企業以外での就労の場	3.0%	11.3%	12.3%	6.6%	3.3%	12.0%	8.3%	14.3%	20.9%
地域での活動や余暇活動への参加のためのしくみづくり	4.2%	6.3%	4.2%	4.9%	10.7%	16.0%	10.7%	28.6%	4.5%
支援センター、医師、精神保健福祉士等がチームとなった相談体制の充実	9.5%	19.2%	24.6%	10.4%	6.6%	24.0%	10.7%	42.9%	32.8%
身近なところで相談ができる相談窓口の整備	15.9%	18.8%	32.6%	22.5%	4.9%	28.0%	15.5%	14.3%	23.9%
福祉の手続きができる窓口の増設	10.1%	13.0%	19.1%	13.2%	3.3%	20.0%	7.1%	0.0%	13.4%
電子申請による手続きの簡素化	3.9%	3.3%	8.9%	6.6%	3.3%	8.0%	0.0%	0.0%	19.4%
財産管理の援助	0.8%	8.8%	5.1%	2.7%	5.7%	0.0%	10.7%	14.3%	4.5%
ボランティアの育成	4.7%	4.2%	3.4%	2.7%	5.7%	4.0%	7.1%	0.0%	1.5%
経済的な援助の充実	28.4%	29.3%	36.9%	36.3%	9.8%	32.0%	27.4%	42.9%	41.8%
情報通信分野の充実	1.9%	0.0%	4.2%	1.6%	1.6%	4.0%	1.2%	0.0%	7.5%
災害時における避難誘導体制の確立	14.8%	12.6%	7.6%	13.7%	18.0%	0.0%	10.7%	28.6%	7.5%
緊急時に受け入れ可能な拠点の整備	20.1%	16.3%	8.9%	11.5%	15.6%	16.0%	8.3%	28.6%	13.4%
介助者への支援	11.8%	15.1%	5.5%	7.1%	6.6%	8.0%	2.4%	14.3%	3.0%
障害のある人についての地域の事業者や住民の理解を深めるための活動	5.9%	11.7%	9.7%	6.0%	14.8%	12.0%	9.5%	14.3%	19.4%
障害のある人へのコミュニケーション支援	5.7%	2.9%	6.4%	3.3%	3.3%	4.0%	2.4%	0.0%	7.5%
障害者団体の自立活動に対する行政の支援	2.7%	9.6%	5.1%	2.7%	4.9%	0.0%	9.5%	28.6%	9.0%
障害福祉サービスの情報提供	11.4%	10.9%	15.7%	10.4%	4.9%	8.0%	7.1%	28.6%	9.0%
差別・虐待防止の周知・対応の推進	2.4%	10.9%	13.6%	4.9%	15.6%	12.0%	6.0%	0.0%	17.9%
その他	1.0%	2.5%	6.4%	1.1%	2.5%	8.0%	2.4%	0.0%	11.9%
特にない	8.6%	9.2%	8.5%	7.7%	10.7%	12.0%	8.3%	0.0%	3.0%
無回答	14.4%	11.3%	6.8%	10.4%	18.0%	12.0%	19.0%	28.6%	4.5%

※割合が１～３位の選択肢について、あみ掛けしている。
※各項目は表記を省略して記載している。実際の項目の詳細は次のとおり。

１　在宅福祉サービスの充実（ホームヘルプ、入浴、外出支援等）
２　在宅の給食サービスの充実（食事を家庭まで届ける）
３　入所施設の整備（障害者支援施設）
４　通所施設の整備
５　保健医療サービスの充実（検診、専門的な機能回復訓練、訪問指導、医師会との連携等）
６　自立のための訓練（身体機能・生活能力の向上を図る訓練）
７　住宅の整備・改造のための支援
８　地域で生活できる住宅の整備（グループホーム、生活ホーム等）
９　暮らしやすい街づくり（道路の段差解消、点字ブロックの整備、案内表示等）

10 療育・保育・教育の質の向上
11 働く機会の充実（職業訓練の実施、働く場の確保等）
12 一般企業以外での就労の場（就労継続支援等）
13 地域での活動や余暇活動への参加のためのしくみづくり
14 支援センター、医師、精神保健福祉士等がチームとなった相談体制の充実（生活相談、療育相談、職業相談、計画相談等）
15 身近なところで相談ができる相談窓口の整備
16 福祉の手続きができる窓口の増設
17 電子申請による手続きの簡素化
18 財産管理の援助（財産保全サービス、成年後見制度等）
19 ボランティアの育成
20 経済的な援助の充実（医療費の補助、手当・年金の拡充等）
21 情報通信分野の充実（パソコンの貸与、情報通信ネットワークの構築、公衆ファクス等）
22 災害時における避難誘導体制の確立
23 緊急時に受け入れ可能な拠点の整備
24 介助者への支援（短期入所及び一時預かりの場の充実）
25 障害のある人についての地域の事業者や住民の理解を深めるための活動（啓発、福祉教育等）
26 障害のある人へのコミュニケーション支援（手話通訳・要約筆記等）
27 障害者団体の自立活動に対する行政の支援
28 障害福祉サービスの情報提供
29 差別・虐待防止の周知・対応の推進
30 その他（ ）
31 特にない

(2) 福祉サービス全般の満足度

市の障害者施策全般については、ほぼ全ての種別で『満足している』が『満足していない』を上回る

『満足していない』は前回調査よりも減少

【調査結果から読み取れること】

障害者施策全般について、「満足している」、「少し満足している」を合わせた『満足している』と「あまり満足していない」、「満足していない」を合わせた『満足していない』を比較すると、発達障害者が同率、その他の種別では概ね 10%から 30%、『満足している』が多くなっている。

前回平成 28 年度調査と比較すると、身体障害者、知的障害者、精神障害者、難病患者、発達障害者のいずれも、『満足していない』は少なくなっており、市の福祉施策についての評価は改善している傾向がみてとれる。

【障害種別ごとの結果】

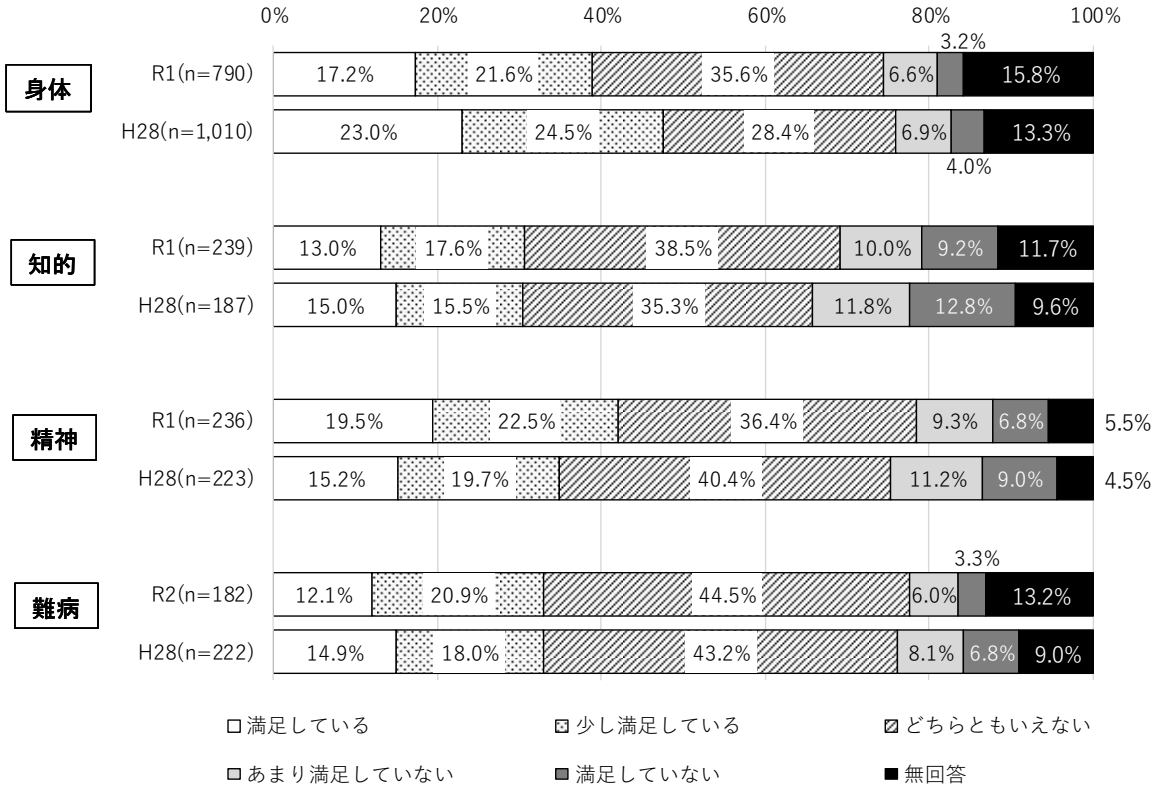
川越市の障害者施策全般について、『満足している』と回答した人の割合は、身体障害者は 38.8%、知的障害者は 30.6%、精神障害者は 42.0%、難病患者は 33.0%、施設入所者は 18.9%、特別支援学校高等部 3 年生は 36.0%、グループホーム入居者は 23.8%、高次脳機能障害者は 7 人中 2 人、発達障害者は 23.8%となっている。

また、『満足していない』と回答した人の割合は身体障害者では 9.8%、知的障害者は 19.2%、精神障害者は 16.1%、難病患者は 9.3%、施設入所者は 7.3%、特別支援学校高等部 3 年生は 24.0%、グループホーム入居者は 14.2%、高次脳機能障害者は 7 人中 1 人、発達障害者は 23.8%であった。

発達障害者では、「満足している」、「少し満足している」、「あまり満足していない」、「満足していない」の回答が同率であったが、その他の全ての対象者では「満足している」あるいは「少し満足している」が「あまり満足していない」あるいは「満足していない」を上回っている。

前回調査結果と比較すると、『満足していない』は身体障害者で 1.1 ポイント、知的障害者で 5.4 ポイント、精神障害者で 4.1 ポイント、難病患者で 5.6 ポイント、発達障害者で 14.1 ポイントそれぞれ減少している。

図：市の障害者施策全般についての満足度（単数回答）



川越市障害者福祉に関するアンケート調査報告書
《概要版》

発行日　令和２年３月
発　行　川越市福祉部障害者福祉課
川越市元町１丁目３番地１
電　話　049-224-5785（直通）
ＦＡＸ　049-225-3033